

---

# 小夜機人

あやゑ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小夜機人

### 【Nコード】

N9114C

### 【作者名】

あやゑ

### 【あらすじ】

人と見紛う程精巧に作られたからくり人形「機人<sup>からひと</sup>」を治す仕事をしている少年と、一緒に住んでいる三人の機人の話。少年九榔京一郎は、仕事先で出会った機人「里黄」から里黄の住んでいる傍の鹿縞山に居る狸の源三郎の話を耳にする。だが鹿縞山には今は狸はおらず、かつて白銀貉という名の狸が生息していたが

## 第一話　　機人

桜も満面に咲き誇り、はらはらと舞い散る花びらの中、  
一人の少年が行李を担いで坂道を歩いている。

少年は作務衣のような形をした和服に、踝より少し上で裾を絞っている独特の履き、

足には草履という到って一般的な格好をしている。

ただ一つ変わっていると言えば、左手にはめている手甲のような物。この手甲のような物こそ、少年が何者であるかを雄弁に語っていた。手甲には随分とかすれた文字で「九櫛」と書かれている。

担いでいる行李の大きさは、およそ三尺程であり、  
柳織で作られた見た目にも由緒ありそうな行李であった。

この日は太陽も良く照り付けており、少し動くだけでも汗が滲んできそうな晴れやかな天気の下、

少年は額に幾筋の汗を流しながら歩く。

その顔は整っては居るものの、あどけなさが残り、瞳も大きい。  
将来成人になった時が楽しみだと思わせる顔立ちではある。

坂道を上りきった所には、一軒の藁葺の家屋があった。

家屋はかなりの広さであり、二家族位は楽に住めそうな程である。  
脇には家屋と同じ位の広さの畑もあり、その傍には山水を循環しているであろう、

古びた水質循環器がゆつくりと、穏やかに動いていた。

少年は循環器を見て、

「この水車、まだ動いているなんて……やはりお郷さんは物持ちの良  
い人だ」

と少し驚いたように呟く。その時、

畑の近くに穴が開いているのを見つけた。

「……ん？なんだろう……」

直径にして約3尺程の穴がそこには空いていた。

首をかしげたまま屋敷の玄関まで歩き、玄関脇に備え付けられていた木槌を掴み、

同じく備え付けの木板を二度ほど叩く。

中々良い木を使っている板と槌のようで、家の中に乾いたながらも温かい音が響いた。

少年が懷から布巾を取り出し、額の汗を拭いながらさっきの穴を気にして窺っていると、

家の中から返事が返って来た。

「はいはい、今行きますんで。少々お待ちになってくだされな」  
声の主は、老女の物であった。

襖を開け現れたのは、物腰も柔らかなお婆ちゃんという言葉がいかにも似合う老女だった。

「あ、どうも。九櫛です」

頭を下げて挨拶をする少年。

手に付けている手甲と同じ名を名乗る。

少年を見て意外そうな顔をした後、柔和な笑顔を見せる。

「おやおやまあまあ。京一郎さんが来てくれたんかい」

「あ、はい。今日は祖父の代わりに来ました」

「おいや？先生は体調でも悪いんかい？」

その言葉に京一郎は苦笑しつつ、

「いやあ、あの人は始終元気ですから。何せ薬湯の味も知らない人ですからね」

と冗談交じりに答える。

実際、祖父が医者にかかっている所は見ただこと無い。

老女もそれは十二分に知っているようだった。

「あつはつは、それもそうでしたねえ」

「今日は爺さんが先約があるのを忘れちゃってまして、僕が代わりに来た次第なのですが…」

あの、もしご不満でしたら明日改めて爺さんを連れてきますので」「  
いえいえとんでもない。若旦那の腕が確かなのは知ってますから

ね」

「若旦那…いやその、そんな呼び方しないで下さいよ…。僕なんてまだまだですから」

若旦那と呼ばれ、むず痒そうにする京一郎。

「そんなご謙遜なさらずとも…。それでは、すいませんが茶の間で待つて頂けますかね。」

今里黄に洗い物をして貰っていた所なんですわ」

「あ、はい。それでは失礼します」

京一郎は頭を下げ、敷居を踏む事無く跨いで促された通り茶の間に向かい、

行李を降ろして座して待つ。

暫し後、茶の間の襖を開けて一人の体格の良い男が現れた。

その体に見合った顔立ちで、眉も太く、鼻立ちの良い男である。

男は少年の前に立ち、正座をしてうやうやしく頭を下げる。

…その男は、人とは異なる「人形」であった。

一般的には「からひと機人」と呼ばれる「それ」は、人とは違いその骨肉を木と糸、

そして体を樹脂に纏わせた、人と見紛う程精巧且つ緻密に作られた物である。

彼は特に、力仕事等に特化した機人であった。

機人は別に珍しい事でもなんでもなく、この時代この国に置いては極有り触れた存在だ。

だからこそ、こうして京一郎は彼の治療をする為に此処に訪れる事が、

生業として成り立つのである。

「それじゃあ若旦那。私はお茶とお菓子の用意をして来ますんで」  
老女は京一郎に会釈をし、奥の間へと向かって行った。

「あ、いえいえ、お構いなく！…後出来れば若旦那つても辞めて欲しいんですが…」

その背中に一声かけ、改めて男の正面に向き直りお辞儀をする。

「…ふう。あ、どうも、九櫛です」

笑顔で話し掛ける京一郎。

里黄と名付けられたその機人は、その言葉に頷く。

「九櫛様、里黄で御座います。今日は宜しく願います」

人に不快感を与えない温かい声が響く。

「それじゃあ、具合が悪い所を見せてくれますか？」

その言葉にこくりと里黄は頷き、右腕を捲って見せる。

その逞しい腕の表面にはヒビが入っており、肌は欠け落ちて中が露出している。

人間で言う筋組織の代わりを努めているその筋には幾本か切れ目があり、

ほつれていた。

「肘の部分が割れちゃってますね…。腕は動きますか？」

「はい、少し動かしにくいですが、出来ない事は無いです」といって男は肘を曲げて見せる。

露出した部分から、小気味悪く軋む音がする。

京一郎は慌てて制止する。

「あ、それ以上はいいですよ。一体何があつたのですか？」

「畑仕事をしていたら、急に源三郎が飛び出して来たんですよ。それで驚いてしまって

転んだんですが、その時に地面に腕をついてしまいました…」

困った風に顔をしかめる里黄。

「なるほど。全力でついてしまったと…。ひょっとして、畑の大穴って…」

「はい…恐縮です」

それで京一郎は納得する。

恐らく、咄嗟の事で力の抑揚が利かなかったのだらう。

機人の力で地面に全力で突きを打ち込んだのだから、あれくらいの穴は空いて当然だらう。

「そつえば…源三郎って、狸の源三郎ですよね？」

「そうです。あいつといたら、用意してあげたご飯も食べるのに作物にも手を出すんですよ」

源三郎とはこの家に毎日のように来てはご飯をねだっている野良狸だ。

名前を付ける前から、お郷さんも里黄もまるで飼っているかのように可愛がっている。

「それから来てるのですか？」

「いえ、さっぱりです。少しは悪いと思ってるんでしょうかね」

「治って元気になった所を見せてあげればすぐにでも戻ってくると思いますよ」

「ええ。それなら嬉しいんですけどね」

京一郎もそれに倣って笑いながら、行李の蓋を開ける。

中から手のひらほどの大きさの古びた漆器と深皿を取り出す。

深皿には、饅頭ほどの大きさの水飴のような物が乗っていた。

「所で…直ぐ治りますか？これから収穫も控えていますので…」

ほとほと困った様子の里黄。

この家は、お郷と里黄の二人暮らし、収穫という力仕事をするには、里黄の存在は欠かせない。

「いえいえ。これ位なら大掛かりにならずにこの場で治せますので。

大丈夫ですよ」

そう言いながら京一郎は左腕の手甲に右手をかざす。

すると、手甲から射出されたかのように指の間に針が現れた。

針の尻には、見えるか見えないか位の細さの糸が見える。

「少しでも違和感があったら言って下さい。それでは始めます」

先ほどまでの柔らかな表情から一変、真剣な目付きへと変わる。

京一郎は丁寧ながらも小気味良い調子で治療を始める。

まず切れた筋と筋を縫い合わせ、ほつれを無くす。

これが最も難しい作業になる。筋の一本一本はとても細く出来ており、

これを元のように繋げる事が出来なければ動かした際に捻れが起こ

り、

予期せぬ動きを見せたり、最悪腕が捻り切れたりするだろう。

京一郎はそれを一本一本きちんと縫い合わせて行く。

その間十五分、京一郎は一言も話す事無く集中していた。

「よしつと。後、欠けた部分は持ってますか？」

その言葉を聞いた里黄は懷から手ぬぐいを取り出し、京一郎に差し出す。

その中には、肌色をした幾つかの破片があつた。

「それではお借りします」

その欠片を、京一郎はまた針と糸で元の形状にまとめ、縫い合わせる。

深皿にあつた水飴のような物を欠片を繋いだ物に塗り、欠けた時に無くした微細な部分を補う。

次に京一郎は漆器の蓋を開ける。そこには幾枚か薄皮のような物が入っていた。

欠けた部分縫い合わせた欠片を当てはめた後、表面に貼り付けて手で優しく撫でて馴染ませる。

一分か二分程の後に指を離すと、繋ぎ目も皮膚の色も一目にもわからぬようになっていた。

治した箇所周りも触診し、不具合が無いか確かめる。

「よし、これで治りました。試しに少しでも動かしてみてくださいませんか。

後、この軟膏が里黄さんの肌になるまでは、余り急には動かさないで下さい」

京一郎の言葉の通りに、里黄は緊張した面持ちで腕を幾度かぐつぐと曲げて確認する。

「…九櫛様！大丈夫です。一切違和感ありません！」

感銘を受けたかのように嬉々として喜ぶ里黄を見て、京一郎も安心したようだった。

「良かった。これで収穫も大丈夫ですね」



「どうですかい？直りましたかねえ」

お茶とお茶菓子を持ってお郷さんが現れた。その姿を見るなり、里黄は興奮気味にお郷に

「ええ！お郷さん。これで収穫も大丈夫です！」

と無事を告げる。

「ああ…良かったねえ里黄。若旦那、どうもありがとうございます」  
お郷も、無事に治った里黄を見て、心から安堵しているような顔だった。

「いえそんな…。ははは。出来れば若旦那つてのを止めて貰えと…」

ぼそと呟く京一郎を尻目に、里黄は勢い良く立ち上がる。

「それじゃあ早速私は収穫をして来ます。九櫛様、本当に有難う御座いました！」

それでは失礼します！」

そのまま里黄は裏手へと向かって行った。

慌てて京一郎は声を張って注意する。

「あ、あの！なるべく力を抑えてお仕事して下さいね！」

その様子を嬉しそうに見ていたお郷が、

「あの子は仕事が出来るのが本当に嬉しいみたいだねえ」

とにこにこ笑った。

その後茶の間では、京一郎とお郷が残され、そのまま茶飲み話を続いていた。

「最近、大手の機人屋もありますがね、あんまりいい噂も聞かないですからねえ」

「そうなんですか。僕はその辺りの事はからつきし疎くて」

「この前もね、町の真中におつきく建ってる…なんでしたっけ？」

思い出せないお郷に、齧っていたカリントウを飲み込んで京一郎が助け舟を出す。

「葉梟堂…の事ですかね？」

葉梟堂はこの界限、いやこの国でも有数の規模を誇る機人で商いを

している店である。

国からの直接の依頼も数多くあるようで、随分と羽振りが良い。

この店で売り出されている機人は見た目も良く、

顧客一体一体の特別注文にも応対できるという触れ込みではあった。

「ああ、そうですそうです！葉梟堂にも一回見てもらったんですが、  
ね、

うちの里黄は古すぎて治せないと言われちゃいましてね。拳句の果  
てには、

新しい機人にしてはと言われましたよ……」

その時の事を思い出したのだらう、柔和な顔ではあるものの、語気  
を荒くする。

「確かに、若い頃に買ったものですし、今までも幾度も故障しまし  
たがね。

それでも私にとっては孫のような、いえ孫そのものなんです。それ  
を買い替えるだなんて……」

その老女の怒りは、京一郎にも痛いほど伝わってきた。

確かに、里黄は相当古い型の機人ではある。

だが、自分と昔から寝食を共にし、愛情を注いできた孫を新しい物  
にしるだなんて言われて頷く親は居ないだらう。

「周りは新しい方が便利だなんて言いますけどね、私は里黄で十分  
ですよ。

今はあの子と一緒にこの生活が何よりですわ……」

「わかりました。僕達も出来る事ならお手伝いします。

勿論、爺さんにも無理矢理にでも来させますから」

「ああ……それは心強いですわ。ほんにありがとう御座います……」

その後、幾ばくかの謝礼とついでに土産にと饅頭を一抱え貰った京  
一郎は、

里黄とお郷さんに見送られながら、何度も頭を下げつつ帰路に向か

つ  
た。

## 第一話　　機人

「ふう、やっと着いた。そういや、蔵の片付けもしないとな…」  
里黄の治療を無事終えてから一刻余り過ぎた頃。

京一郎はそう呟きながら我が家の門を潜ろうとしていた。

その時、庭で何やら探し物をしているような素振りをしている少女の後姿を見つける。

「あれ？アイツ何をやってるんだろ…？おい」

京一郎の呼び掛けに気付いた少女は、にかつと笑いながら振り向く。

「あ、京一ちゃん。おかえりなさいませ」

と返事を返す。底抜けに明るい声だ。

「ああ、ただいま。何か探し物でもしてるのか？そんな感じだったけど」

京一郎は近寄りながら彼女の様子を窺う。

少女の名前は「那月<sup>なつき</sup>」といい、

黄色の髪結いで腰半ばまで伸びた髪の毛を縛り、

緋色の和服は動きやすいように襷掛けにしている見た目にも活発そうな娘だ。

こうして近くで比べると京一郎よりも、少し背が高い。

彼女の事を何も知らない人でも、一目で天真爛漫な子だと印象を受けるであろう、

見ているだけで人を元気にしてくれるような明るさを持つ少女。

その陽気さは九櫛家ならず近所でも重宝がられており、

この辺りの子供達の面倒を見て一緒に遊んでいる姿はこの近所じゃ見慣れた風景となっている。

その実、子供達が那月の面倒を見ているかもしれないが。

時折、その天真爛漫さを盾に暴走してしまい、

大小なりとも事件を巻き起こしてしまうやっかいな天賦の才を持っている。

が、それであつても決して周囲に疎まれたりしないのは、

彼女の人徳の表れと言つてもいいかもしれない。

「えっとね。実はさっき私が買つて来た鰯の干物が猫に取られまして…えへへ」

そんな彼女でも罰が悪いのか、珍しく照れ笑いにも似た顔でそう答える。

「まさか、猫にやられるなんて余りにもベタな…」

古典的過ぎて、最近じゃあ漫談師の話の種でもとんと耳にしないような偉業を目の前の少女は成し遂げた事になる。

「うん。その物干し台にかけて置いたんだけど、ちょっと目を離れた隙に…やられちゃいまして…そのー」

彼女なりに必死に探していたのだらう、この距離で見ると髪の毛が少しばらけている。

方々を駆け巡っていたのだろうか。

「ばれちゃう前に取り返そうと思つたんだけど…ゼーんぜん。駄目でした」

「そっか、駄目だったか」

「犯人は犯行現場に戻るって聞いた事があるから、改めて戻つて来たんだけど」

その推理は見事に空回りしたようだ。

「それは窃盗じゃなくて放火犯とかじゃないか…？まあいいけど、それじゃあ今頃鰯はその猫の胃袋の中…か」

しかもこの陽気だ。

その憎めない小さな犯人も今頃ご満悦丸出しで何処かの屋根で昼寝と洒落込んでいるだらう。

「ううう…おのれえ！今度会つたら食べた鰯ごと丸呑みにしてやる」

ぶんぶん両手を振りながら雲ひとつ無い青空に向かって、那月は空しくも悲痛な訴えを叫んでいた。

「さりげに怖い事言ふなよ…ま、このままじゃ確かに可哀相だよな

…」

京一郎は懷に右手を入れ、何やら手探りしをする。

その間も、那月はなにやら呟いていた。

「だって少しは鰯味が残ってるかも知れないし…」

「那月。ほい」

京一郎は右手を突き出し、まだ意気消沈している那月に掌を差し出すように仕向ける仕草をした。

「？」と不思議そうに差し出された那月の両手に、小銭が数枚音を立てて載せられる。

「…え！？京一っちゃん、お小遣いくれるの？ごっちゃんです」  
わけのわからない感謝の言葉を述べる那月。

京一郎はそうじゃないと苦笑する。

「鰯の開きをもう一回買つて来てつて事。そうじゃないと今晚は奈月だけおかず無しになつちゃ」行つてきまあああすうう…！」

と、京一郎が全て言う前に那月は脱兎の如く駆け出して、気が付いた時にはもう視界から消えていた。

「うぞ…つて…早っ」

余りの速度に溜め息も出なかった。

この場に一人残された状態で居てもしょうがないので京一郎は玄關に戻り、行李を床に置いて

「ただいまー」

と声を張る。

すると、台所から返事が聞こえ、暖簾をかきわけてこちらへと一人の女性が出迎えてくれる。

「おかえりなさい、京一郎さん。お仕事お疲れ様でした」

優しく暖かいこの声の主の名は「螢雪<sup>まゆか</sup>」という。

台所で夕飯の支度をしていたのだらう、藤色の和服を着、その上に真っ白な割烹着を着ている彼女は、

それだけであっても、豪奢な単を着ているやんごとなき方々よりも華やいで見えるので困る。

それほどまでに完成された容姿をしていた。

艶やか且つふわりとした髪の毛、すらりと理想的な女性の体軀を表現している曲線も、

笑顔を絶やさないその美しい顔を際立たせる事に一役も二役も買っている。

彼女はこの家に住んでいる「住人」の中でも一番の年長者であり、九櫛家においては主に家事全般を請け負ってくれている母親のような存在だ。

蛍雪以外の九櫛家の住人は、家事関係にとんと疎い。

なので、蛍雪こそがこの家の生命線とも言えるし、彼女が居なければ京一郎達はこぞつて飢え死にしている事だろう。

「いえいえ。あ、そうだ。お郷さんから饅頭を貰ったんだ。はいこれ」

と、行李の蓋を開け、包みを蛍雪に手渡す。

「まあ、とっても美味しそうなお饅頭ですね。きつと那月ちゃんもああ あら？」

ふと何かを思い出したのか、包みを持ったまま首を傾げる蛍雪。

「そういえば京一郎さん、那月ちゃん見ませんでしたか？ちよつと前から姿が見えないんですよ」

「え？那月ですか？い…いやあ、知らないなあゝあははは」

京一郎はとぼける。しかし如何せん余りにもあからさま過ぎるが。

「おかしいですねえ…さつきまで誰かと会話をしているような気がしたんですが…」

「え？あ！…そういえば爺さんは？！まだ帰ってきてないのかな！？」

流石に京一郎自身不自然極まりないと思える程の話題転換だったが、どうやら彼女の話題を変える事に成功したようだ。

「え？あ、はい。先生なら今日はお帰りになりませんよ」

「あれ？…そんなに時間のかかるような仕事だったっけ？」

「ええ…今日中には帰れず、夜通しの仕事になると言って出ていか

れましたけど」

祖父の雄大が今日向かった先での仕事は、予約帳を見る限りはそれほど大した仕事では無かったと京一郎は記憶している。

今日京一郎が代理で行った里黄の件と似たり寄ったりな内容であったはずだし、場所もさほど離れては居ない。

が、肝心の依頼先の事を思い出して、京一郎は納得する。

「そついや、爺さんが行った所は……」

「はい、倉敷にあるお店ですね。お店の名前は……葛美織かずらみおり」だったかと」

雄大の行った店「葛美織」は、隣町の歓楽街にある未成年お断りの場所だった。

古典芸能や、美しい単を纏って舞を踊る人や機人を見て興じ、女性に囲まれて酒を楽しむ……所謂「おとなのお店」である。

その筆頭を賜っている随一の舞子である機人「柚紗ゆずさ」が不調を訴え、雄大に依頼があつたのである。

良くも悪くも京一郎には荷の重い仕事だった。

そもそも未成年である京一郎には刺激が強い場所であり、まだまだ知らなくても良い場所であるし、

筆頭の舞子と言うのなら、要するに店の二枚看板の内の一つである。最も客を集める大事な役目。

飯の種を植えて金となる木である。

その看板を治すと言う責任は、まだまだ未熟な京一郎には重圧が伴って当たり前。

寧ろ、そこいらにいる職業機人師ならば、金を払ってでも断る仕事である。

その点、祖父の雄大ならばそんな失敗をするような事はしない。

只でさえ若い頃から「九櫛の機人に似合う紅無し」とまで言わしめるほど、

女性型の機人においては現役を退いても尚権威とも言われる機人師だ。



そんな雄大ならば直ぐに終わるであろう仕事を、一晩かかると言ったのなら、

それはどう考えても仕事が終わった後の「お楽しみ」に理由は絞られる。

有体に言えば雄大は「女好き」であり「すけべえ」であり「えっちっち」なのだ。

明日酒臭い赤ら顔で帰ってくるのが目に見えるようだ。

「あー…そゆことか。全く、爺さんの女と酒好きには頭が下がるよ…」

「くすくす…でも京一郎さんにもその血は流れてらっしゃるんですよ?」

「ぐっ…」

それを言われると、寧ろぐうの音しか出ない。

雄大の能天気極まりない鼻の下を伸ばしながらの豪快な笑い声が頭に響き、気が重くなる。

「てことは俺も将来あなるのかな…」

「そうですね…私としては、機人師としての技術においてはそうなつて頂けると嬉しいですが…」

私生活の面を見習ってしまうと…少し困りますよ?」

「俺もそうならないように心がけます…じゃあ螢雪さん。俺、蔵の片付けをしますんで」

「はい、わかりました。なら、夕ご飯が出来ましたらお呼び致しますね」

…夕ご飯?

その言葉を聞いて京一郎は頭の片隅に追いやっていた事を思い出す。誰でも無い那月の事だ。

さっきまでは雄大が食卓に居るという前提で、一匹足りなくなっただからこそ京一郎はお金を渡して、

那月は猛然と駆け出していったわけだ。

「あのー…時に蛍雪さん？今日のおかずはなんですか？」

「あら、京一郎さんも食いしん坊さんですね…ふふ。今日は鰯の開きです。」

お魚屋のご主人さんが取っておきのを用意するって言うてくれましたので、那月ちゃんにお使いを頼んだんです。確かにご主人の仰る通り、台所にある四枚。どれもとっても美味しそうなんですよ」

「四枚…」

那月はどうやら、四枚と言われた事など忘れて何時も通り五枚買ったのだろう。

だからこそ、一匹を猫に取られた事は知らなくても、四枚あるのだから雄大が不在と知っている蛍雪は不信に思っていないのだ。

そこに那月がやってきて一枚増やしたら…おじやんだ。逆に不信がられるだろう。

蛍雪は、そんな事くらいで怒るような人じゃないが、

ごまかそうとした事についてはなんらかのお叱りが来るだろう。

例えば、罰としておかずが一品減らされるような物なら、那月にとつては死活問題である。

家族の危機を救うのは家族の仕事だと口すっぱく言われている京一郎としては、何とかせねばなるまい。

「一杯ご飯も炊きますから、沢山食べてくださいね？」

知つてか知らずか、蛍雪は京一郎がよほど楽しみにしているのかとにこにこ笑っている。

「は、はい！それはもう喜んで！それじゃあ張り切って蔵を片付けられます」

「はい、いつてらっしゃいませ」

ひらひらと手を振る蛍雪に会釈をして、京一郎は蔵に向かうと見せかけて、門から出て行った。

「まだ間に合うかも…」

京一郎の頭に思い浮かぶのは、魂が抜けたかのようにぼかんと食卓に座る那月の顔であつた。

一目散に目指すは勿論魚屋である。

そんな見えない筈の後ろ姿を暫し微笑んだまま見送つて、台所に戻らんとする蛭雪。

ふと廊下から茶の間に掛かっている柱時計を見て、笑みをこぼす。

「あら……。もうこんな時間。この時間だと京一郎さんと那月ちゃん、鉢合わせになるかも知れないかしら？」

うふふ。まあ、罰は那月ちゃんにも蔵のお片づけ手伝つて貰う事でさ、夕ご飯の支度支度」

そう一人呟いて、彼女はその腕を振るわんと意気揚揚と台所に戻つていった。

## 第一話　　機人

京一郎が那月を探しに走り出してから十分足らず。

右手にある酒屋の角を曲がり、その先にある橋を渡れば魚屋までもう直ぐという所で、

橋の中ほどの地点に見覚えのある緋色の和服がちらと映る。

「あ、居たあつ」

それを那月と認識した京一郎は、足を速めた。

すると、彼女の傍にもう一人長身の人間の姿が見える。

走ってくる京一郎に気が付いたのは那月で、

「おゝい！京一っちゃん！」

と町中にも関わらず大声を上げて京一郎を呼ぶ。

すると長身の者もその声で気付き、京一郎を見て頭を下げる。

京一郎が二人の元へと走り寄り、ぜえぜえと呼吸を整えていると長身の者が

「若先生、どうかなさいましたか。そのように急がれて」

と、低く通る声の中に鋭さと敬いを含めて問い掛けてくる。

自分より若く、背も小さい京一郎を若先生と呼ぶこの女性の名は「鰻」。

彼女もまた、九櫛家に住んでいる一人だ。

京一郎や那月の歳の離れた姉に見える程に背の高い彼女は、

後髪は肩で切り揃え、前髪は眉毛に掛かる程度で真っ直ぐに揃えられている。

その髪型は一見おかつぱ頭にも見え、彼女のような外見の女性には似つかわしく無いようにも見えるが、

逆にその髪型に違和感を覚えぬほど、切れ長の鋭い目は他を寄せ付けないような空気を醸し出し、

鰻の何があるうと動じぬ落ち着いた謹厳実直な性格である事を隠さずに表している。

竹刀袋を担ぎ、袴を履いたその姿は、見紛う事無く剣士その物であり、

実際、彼女は剣術道場の帰りであつた。

彼女は日頃町内や、少し離れた剣術道場へ出向き、

その道場の門下生に剣術を教える事でお金を稼いでいる。

自己鍛錬と実益を兼ねた実に理想的な仕事だ。

京一郎も毎日仕事がある訳でも無く、

仕事をしたとしても駆け出しの京一郎ではそれ程の収入は見込めない。

かつては当代きつての機人師として名を馳せた雄大であっても、  
そうそう大口の仕事にありつけるわけでもない。

無論、機人を一から作り上げる仕事をすればそれなりの報酬は得られる。

だが、雄大は半分引退をした身、機人造りから退いて久しい。

京一郎はまだ一から作れる程の技術は持っていない。

昔の顔なじみや伝手は数多く居るので、それなりに仕事は来るのだが、

「お友達価格」でのご奉仕を提供する為、時折原価割れをしてしまう始末である。

特に雄大は女性に弱いので、ありえない見積もりをして京一郎達の度肝を抜くのもざらであつた。

というわけなので定期的な収入が見込める彼女が居るからこそ、

九櫛家は一家五人今日もめでたく美味しいご飯が食べられると言う物なのだ。

普段の運動不足が祟つたか、未だ呼吸を整える事が出来ずに、

「はあ…はあ…鰻さん。出稽古終わったんだ？何時もより…早かったですね」

と喘ぐように聞く。

「ええ、今日は私が練習項目を決めて欲しいと言われたまじしたので、

理想的な項目を決めて稽古を始めたのです。ですが、皆あっけなく倒れてしまいました……」

「うわー……一体どんな稽古をしたのか怖くて聞けないやあ」

いかにも他人事のようにあっけらかんと言う那月。

「全く……困った物だ。結局、今日の稽古は切り上げになってしまったので、

家に帰る最中にこうして那月と鉢合わせた次第です」

門下生の不甲斐なさを嘆いている鰻を見ながら、

京一郎はその可哀相な門下生達の事を考える。

鰻の事だから、自分のやっている稽古方法を実践させたに違いない。以前、自己の運動不足を考えた京一郎が運動不足解消にと鰻に付き合って運動をしようとした際に、

鰻の稽古の内容を聞いただけで筋肉痛になった事がある位だ。

準備運動が終了した時点で京一郎は継続不可能となり、

その時對抗馬の那月が何時もの如くのお調子乗りで鰻の練習に付き添い、

なんとか齧りついて行ったものの、

午前中の稽古だけで物言わぬ人になり、その後半日は二人で縁側に石化して消沈していた事を思い出す。

今度菓子折りを鰻に渡して道場に行つて貰わなきゃなと考えつつも、本来の要件を思い出して那月に切り出した。

「そうだ、なあ那月」

「ん？な〜に？」

「さっきの鰻の話なんだけどさ。魚屋さん、もしかしてもう行っちゃったか？」

ぴちぴち。

「あ、うん。そりゃもうとっくにだよ」

ぴちぴち。

「げ！手遅れか……」

ぴちぴち

「えー！手遅れって…手遅れなの！？私は魚買ったから死んでしま  
うのー！？」

ぴちぴち。

「その手遅れじゃ無いってば…」

ぴちぴち。

「那月、魚を買った位で死ぬものかね」

ぴちぴち。

二人のやりとりに参加しながらも不思議そうにしていた鰯が、京  
一郎に問う。

「それにしても若先生、一体何があつたんですか？鰯…とは魚の鰯  
の事だとは思いますが…」

「ああ。その魚の鰯なんだけどね…って、さっきからこのぴちぴち  
言ってるのはなんだ？」

確かに先ほどからぴちぴちと音がする。

「え？あ、これの事？」

那月は嬉しそうに腰に吊るしてある巨大な魚籠を外して、二人の足  
元に置く。

「へへ、大漁大漁…じゃーん！」

那月が魚籠の蓋を開ける。

鰯の干物で大漁も無いだろうと思ひながら、京一郎は開けられた魚  
籠の中を覗き込む。

「……………お？」

予想外の出来事に京一郎は呆気に取られる。

魚籠の中身は、確かに魚が居る。

しかし、京一郎が想像していたのは鰯の開きがごろりとなっている  
光景だ。

だが目の前に居るこれは、見紛う事なく鰯。

大層新鮮なのだろうぴちぴちと跳ねている。

「うん、これは立派な鰯だ。先ほども見せてもらったが、中々の物  
だな」

鰻も感心したような口ぶりだ。

「鯉…だね。確かにこれは鯉だ…けど…おやあ？」

『なんで干物じゃなくて鮮魚が入っているのか？』という目線を那月に送る。

その目線を察知した那月は、

「魚屋に行ったら、もう鰻の開き売り切れてて。代わりに特別だよってこれをくれたんだ」

到って上機嫌で答えてくれた。

那月は、愛嬌が頗る付きで良いということもあって、

つついとお菓子やなんかを上げたくなってしまうと町の人は言う。

それだけでなく、那月は魚屋の息子も含め、子供達の面倒を見てよく遊んでいるから、

魚屋の主人にとっては日頃の感謝の代わりにというのも兼ねているのかもしれない。

今の那月の話と、その後少しの京一郎の補足によって現状を理解した鰻が、

「成る程、そう言う事だったのか。なら、鯉を持って帰るのは些か奇怪というのも納得出来る」

と事の次第を把握する。

「ですよね…干物なら兎も角、いきなり鮮魚を持って来られたら珍妙過ぎますよ」

「まあ、これだけの鯉なら蛭雪も許してくれるでしょう。…だが那月。蛭雪に謝る事も忘れないようにな」

京一郎を労った後、那月をたしなめる鰻。

だが当の那月は、

「はい。…それじゃあ魚も手に入れたし、我が家へいざゆか〜んっ！」

と鰻の言葉を聞いているのかいないのか、家の方向に指を差して颯爽と歩き出す。

「鰻さん。ひょっとして那月、何を謝るか忘れてないですか…？」



「そのようですね。全く…能天気な奴だ」

「まあ、それが良い所でもあるんですけどね。」

でも、これで蛍雪さんにおかず無しとか言われて、しよげる那月は見なくて済みそうだからいいとするか」

少し気分がすっきりした顔で、那月の後姿を見ながらそう話す京一郎を、鰻は少し目を細めて呟く。

「若先生は相変わらず…」

「ん？鰻さん、何か言いました？」

「…いえ、私は何も。さて若先生、我々も帰りましょう」

「あ、うん」

先陣を切って跳ねるように歩く那月の後を付いて歩く二人。

そして、魚籠を両腕でかつきりと抱き締めたまま九櫛家の玄関に飛び込むように那月は入る。

その後すかさず

「たっだいま〜！」

と大声で言う。

するとその声に反応して奥の方から『はい』と声がして、蛍雪が現れた。

三人同時に帰ってきた事が意外だったのか、少し驚いた風に

「あらあら、皆お揃いで帰って来られたんですね」

と出迎える。

「えへへ〜」

「あら那月ちゃん。随分嬉しそうだけど、何かあったのですか？」

那月は笑顔のままで、蛍雪を呼ぶ。

「蛍雪さん、蛍雪さん！…じゃっじゃーん！」

那月が差し出した魚籠の中を見て、目を丸くして驚く蛍雪。

「あらあらまあまあ、これは立派な鯉じゃない。凄いわね、那月ちゃん」

「是非是非、これを今宵の一品にして頂けるとおお〜」

蛍雪を拝みながら懇願する那月。

「そうねえ…それじゃあ。那月ちゃんが明日京一郎さんがなさる蔵のお片付けを、

どれ位手伝ってくれるかで献立決める事にしようかしら？」

ころころと笑いながら蛍雪はそう提案する。

一瞬の間に那月の顔が華やぎ、ぐるりと京一郎へと顔だけを向ける。

「京一っちゃん！」

「うわあっ！な、なんだ！？那月」

驚く京一郎に、どんを胸を叩いて意気を張る。

「明日は私に任せておきたまへ！必ずや蔵を綺麗に…いえ！綺麗どころか二倍の広さにして差上げます！なんという事でしょう！」

「か、改築する気か！？」

「それも止む無し！」

「止めよっ！」

「うーっ！京一っちゃんはまさか私からご馳走を奪いますか！蔵の大きさも二倍になって万々歳ではないですか！」

二人のやりとりを笑顔で見ながら、蛍雪が

「くすくす…そんなに頑張ってくれるなら、私もこの鯉でご馳走作らなくてはいけませんね。」

それじゃあ那月ちゃん。悪いけれど、お夕飯の支度を手伝ってくださいか？勿論味見係も兼ねてですけど」

という那月にとってこの上ない甘い誘いの言葉を放つ。

「あ！喜んで…！あああ…鯉こく…洗い…甘酢あんかけ…」

蛍雪の言葉によって那月の心は、もう此处にはなく台所に飛んでしまったようで、

それに追い付かんと恍惚な顔をしながらよろよろと台所へ向かっていった。

玄関に残された鰯と京一郎は草履を脱ぎながら、偉く感心した様子で「蛍雪は相変わらず那月を上手く手繰るな…」

「うん。凄い技術だ…」

と蛭雪の手腕に只々舌を巻いていた。

## 第一話　　機人4

「いつふあぶあつひふあゝふっ！」

「こら、食べながら頂きますをする奴があるか」

「そうねえ、それじゃあ頂いていますになりますものねえ」

「いや蛍雪さん。そう言う問題じゃなくてですね…」

今夜の夕食は、那月の思わぬ手柄により鯉を使った様々な料理が追加される事になり、

那月だけでなく京一郎も鰻も楽しみだという思いを隠せずに居た。それらが並べられた食卓を見る那月の目の輝き様と言ったら無い。子供が玩具の山を目の当たりにしたような目だ。

作った者に対する最大限の感謝の気持を表すかのように、勢い良く食べ始める那月に誘われて他の三人も箸を進める形になり、今日の夕飯が始まった。

「そういえば京一郎さん、今日のお客さんはどうでしたか？お郷さんの御宅に伺ったんですよね？」

早くも那月に一回目のお代わりを渡しながら蛍雪は尋ねる。

「え？ああ、そうです。それですね」

京一郎は今日あった里黄の話搔い摘んで話した。

蛍雪は特に源三郎の事に興味を引かれたようで、

「まあまあ、それは可愛らしい狸さんですねえ」

となにやら嬉しそうに相槌を打つ。

「うん、大分前に爺さんが治療してた時には話だけで、

里黄さんとお郷さんの前にしか出てこないみたいなんですよね」

だが、それに引き換え鰻はなにやら訝しげな表情を浮かべ、鯉こくの入った椀に口を付けていた。

その惑いの表情も一瞬の事で、周囲には気付かれる事も無い速さで直ぐに普段どおりの表情に戻り、蛍雪と京一郎の会話に耳を傾ける。

「たぬき…たぬき…」

「あら？どうした的那月ちゃん」

珍しく神妙な顔付きをしている那月に気が付き、様子を伺う蛍雪。那月が食事中にぴたりと箸を止める事は珍しい。つられて鰻と京一郎も那月の顔を見るが、

「たぬきそば…食べたいなあ…」

その一言で食卓に溜め息が広がる。

呆れたように京一郎が口を開く。

「今食べてる先からもう次に食べる物の事を考えてるのか？」

「ん」。それはそれ、これはこれ。私にとつては全ての食べ物、それぞれの別腹に収まるわけなのだよ京一郎君？ふふん」

妙な自信を持ってしてやつたり顔で那月は胸を張る。

受け取った三杯目のお代わりを抱えながら。

「あーはいはい。それで今食べてるのは何処に入ってるんだ？」

「ん？それはもうつ。ご飯はここで、お魚はここで」。

そうそう、たぬきそばはね〜ここに入る予定っ！」

「いや、指差ししなくてもいいから…」

京一郎がそこで止めたので、那月は再び箸を進めだす。

「んぐ…でもなんでたぬきそばって言うのかな？んぐんぐ…きつねそばは何となくわかるけど」

わしわしとご飯をかき込みながら、那月はふとそんな疑問を投げかける。

「まあ狐つてのは、お稲荷さんには油揚げを供える事から…だったっけか」

「うん。そうそれそれ。でも別にお狸様なんてないし…お供えに揚げ玉なんて聞いた事ないよ」

「うゝん。言われて見ればそうねえ…なんでなのかしら。鰻はわかる？」

蛭雪にそう聞かれ、鰻は箸を一旦置いてから答える。

「ん…そうだな。天ぷらの種を抜いて「種抜き」という言葉があるのだが…。その種抜きという言葉が省略されてそうなったらしい」

「へえ、そうなんだ。鰻さん詳しいですね」

京一郎が素直に感心した顔で鰻を見る。

誉められた事に動揺したのか、鰻はすと視線を外す。

「あ…はい。いえ、これは人伝に聞いた物なので、その…こほん。ですが、狸の如く天ぷらが載っているように「騙す」事から来ているとも聞いた事もあります」

「ええ？それじゃあ、どっちが正しいの？」

「む…私にはどちらとも言い難いな。もしかしたら本来の意味は違うのかも知れないが」

「なんでしょうねえ…」

「なんだろう…」

「…「うゝん…」」

四者四様それぞれの考えを模索していた。

そんな中、蛭雪がぼんと両手を前に合わせて、

「それじゃあ明日はお蕎麦屋さんに行きましようか。」

その時御主人に聞いてみればいいと思いますよ？」

と打開策を提案した。

その提案に飛びついたのは当たり前と言うか当然と言うか、那月だった。

「それだっ！蛭雪さんさっすが」

「ふふっ、有難う那月ちゃん。先生の二日酔いにもいいでしょうし。それに、私も久しぶりにお蕎麦を食べたくなっちゃいましたから」

鰻もその提案に乗ったようで少し顔を綻ばせる。

「そうだな…私も久方ぶりに山菜蕎麦を頂きたい」

「鰻さんは何時もおそばっていうとそれだね」

都合五杯目のお代わりを受け取りながら、那月が茶化す。

「いいではないか。素晴らしい料理は何時食べようと素晴らしいのだ」

「蕎麦掻く蕎麦餅く蕎麦ぼろろ。確かにどれも素晴らしい」  
謎の曲に乗せて那月が歌い出す。

「那月：段々料理じゃなくてお菓子になつてないか？」

「ふふ、こうしてみるとお蕎麦は色々な料理になりますね」

「それじゃあ色んな味が楽しめるような美味しい蕎麦屋は無いか、明日調べますよ。」

確か、明日は仕事は無かつたはずですから」

「私も、門下生達に聞いて見よう。何分食い気が旺盛な者が多いからな」

「それなら、葉梟堂さんのある通り沿いにお蕎麦屋さんがあるんですが、明日はそこにしませんか？」

ちよつと遠いですが、評判も結構良いみたいなんですよ」

と蛸雪が言う。

「葉梟堂…？」

その言葉に反応する京一郎。

そして鰻はその反応を見逃さなかった。

「？若先生…どうかなさいましたか？」

「ああ…葉梟堂の事なんだけどさ。ちよつと聞いてくれるかな？さっきの里黄さんの話にも繋がるんだけど」

京一郎の話は、里黄の治療に対して葉梟堂が渋った件で、その話を聞いた蛸雪と鰻は考え込む。

「…なんで古過ぎて治療できないなんて言っただらうって思ってたさ」

「そうですね…里黄さんは確か、お郷さんの家に来た時にはすでに

お年の方だったと聞いていますが」

里黄の治療を施した後に茶呑み話では、お郷の夫が生前、  
機人屋の奥で埃を被っていた里黄を見つけ、一目で気に入り購入し  
たとの事。

それ以来ずっとお郷の家で生活をしていた。

お郷達は残念ながら子宝には恵まれずにいたが、次第に歳を経る度  
に同居人から息子の様に、そして孫のように可愛がるようになった  
という。

今も、夫亡き今里黄がいるからこそ楽しんで生きる事が出来るとお  
郷は話していた。

「ですが、里黄殿より以前に作られた機人だつて当然数多く居ます。  
あの葉梟堂が、その程度の事で治せ無い等と言うのは些か不可解な

…」

と鰻は眉を潜める。

明らかに葉梟堂に対して不快感を表していた。

「里黄さんを治せなかったのかそれとも治したくなかったのか…ど  
つちなのでしょうか」

「けど、京一っちゃんちゃんと治せたんでしょ？それって、その  
なんたら堂の人より京一っちゃんが凄いつて事？」

「それとこれとは話が違ふよ那月。多少は難しかったけれど、普通  
の機人師なら出来無い仕事では無いからね」

「となると、そう言うことか…」

鰻が一つの結論にたどり着いたのだらう、そんな風に呟いた。

「どういう事ですか？鰻さん」

京一郎の問いに、鰻は一口お茶を飲んで答える。

「あくまで推論ですが、葉梟堂が拒否をしたのは奢れる物の慢心か  
ら来ている事が原因かと私は思います」

「慢心？」



「葉梟堂は数多の腕利きを抱え込んでいる、恐らくこの国でも有数の規模を誇る機人屋です。」

その中でも都を拠点に、このような所にまで店を出しているのは葉梟堂位の物でしょう」

「うん、そうらしいね。でもそれと慢心とどういう関係が？」

「機人の損傷の度合いにも異なりますが。」

里黄殿の今回の件を聞けば、右肘に亀裂、そして表面の剥離に幾本かの筋系断裂…。

機人師の仕事の内容としては決して大きくは無いです。無論、代金もそれなりに軽くなると思います」

「それって…要するにこの程度と言ったら失礼だけど…見入りが少ないから仕事は受け付けないって事？」

「その可能性は高いかと」

「そんな…」

心外そうな京一郎に、蛭雪も付け加える。

「確かに、治すよりも新しい物を買わせた方が何倍もの利益になりますからね。」

ましてや里黄さんは年季も入ってらっしゃいますから、葉梟堂もそのような提案をなさったのでしょう。里黄さんとお郷さんの間柄や繋がりには知らないでしょうから…」

「蛭雪の言った事もそうですが、治療の依頼を一件逃がしたところで、葉梟堂にとってはさほど痛手では無いと思います」

蛭雪と鰯に、那月も上乘せで参戦する。

「でも、お郷さんは困ってたんだよね？人が困ってるのにほっておくなんてひどい話だよ！？」

その空気をなんとかしようと、京一郎は助け舟を出す。

「ま、まあまあ。だけど、そのおかげで俺達もこうして美味しい夕食を食べられる訳だし、感謝しないといけないかも知れないけどね」

「む、それは話が別ですよ若先生。お二人が、葉梟のお零れを貰っているというのは、それは機人師たる九櫛家を冒瀆している事にな

りませんか」

珍しくわずかだが語気を荒げて鰻が非難の声をあげる。

「い、いやいや。そこまで大袈裟な話じゃないよ。」

爺さんはまあともかくとして、俺はまだまだ駆け出しだから。

逆にこういう状況だからこそ、俺も勉強になる機会も貰えた訳だし……」

と必死に説明をする京一郎。

鰻も、京一郎には流石にこれ以上怒る事は憚られるのか、口を慎む。

「先生が真面目に御仕事をして頂ければいいんですけれどね……」

「ぬう……全くだ。先生程の機人師ならば、もつと良い仕事をなさる事も出来る筈。」

そうなれば葉梟のような所にのさばらせる事も無いのだ。だからお郷殿も葉梟堂に持つていこうとしたのでは……」

「いやいや。お郷さんだって、周りの薦めもあつてたまたま葉梟堂に持つていこうとしただけで、

前も爺さんが治療させて貰つてたんだからさ。それに、今回の事でもう葉梟堂には持つていかないって言つてたし」

「むう……先生ならば葉梟堂等物の数にも入らないでしょうに……」

「しかし先生もお年ですから、もう後進の機人師に譲らないと育ちませんからね……」

勿論京一郎さんの事だけでなく、全ての若い機人師に言える事ですけれど」

「能ある鷹は……なんとやら……。先生はその才能を隠す事にしたのだ……」

「だが、鷹もう爪がある事を満天に知らしめているのだぞ？」

獲物を捕らえなければ感覚は薄れていく。研いだ爪も使わなければ意味が無いではないか。

この前も都での大口の仕事があつたというのに断つてしまわれて……」その言葉に、蛍雪と京一郎は顔を見合わせて呟いた。

「ああ…それはしょうがないよ」

「そうですね、しょうがないと思います」

「若先生、蛭雪も…理由を知っているのですか？」  
「氣まずそうに京一郎が答える。」

「帳面を見たけど…作るようにと言われた機人が男性だったからね」  
「ええ、先生は男の方はちょっと。治療はなさるのですが…作るとなると…」

蛭雪が頬に手を当てて溜め息を漏らす。

雄大が、男性型の機人を作るという事は無い。

例え、どれだけの金を積まれても、時の権力者に命令され様がその首は縦に動く事は無いだろう。

かつて幼い時にそれを不思議がった京一郎が雄大に聞いた時には、  
「男子たるものの必然ぞ。浪漫を追わずに機人は作れんわい」  
と端的に言われ、首を傾げながら部屋を後にした事を思い出す。

「そうだったのか…な、なんという破廉恥な…」

余りに下らない理由に驚愕しているのか、鰻が少し怒ったような顔を  
をしている。

「まあ、爺さんだからね」

「そうですね。先生ですからね」

「せんせーは淫猥だあ…」

と、那月が婦人向けの色記事で知ったような言葉を出す。  
恐らく、意味自体も知らずに放っているのだろう。

にぱっと笑いあっけらかんと言い、京一郎の度肝を抜く。

だが、京一郎が注意をする前に、鰻が那月を諷める。

「こ、こら！那月！慎むのだ！」

「え？え？」

急に怒られたので、訳もわからずにいる那月を尻目に鰻は話を元に  
戻した。

「兎に角っ。先生は致し方ないとして若先生ならば」

京一郎に活路を見出そうとしたが、その目論見は容易く崩壊する。情けなく首を振る京一郎に追隨する蛍雪。

「俺も多分、あの爺さんの目の黒い内は作れないよ…ばれたら何されるかわかったものじゃないからね」

「そうですね…恐らく先生のお目の黒い内は…無理かと」

「な、なんと言う事だ…」

これ以上続けると鰯が憤死しかねないので、蛍雪が話を変える。

「あ、そういえばそういえば。お郷さんからお饅頭を頂いたのよ。後でお茶にしましょうね。」

ね？那月ちゃん？」

「うーん。嬉しいけど、私はつぶ餡よりも漉し餡が良かったんだけどなあ」

「…え？」

「…那月、何で中身を知っているんだ？」

「え！？いや、何ででしょうなあ…。あはは」

（食ったな…）

（食べたな…）

（食べちゃったのね…）

二人のじとりと見つめる目と、一人の何時もの笑顔だが困ったような目を受けて、

那月は能天気には笑っていた。

## 第一話　白銀猪

食事も終わり、饅頭をお茶当てにしての茶の時間も終わった後、  
各々がそれぞれの自由な時間を過ごしていた。

一人は湯上がりのほこほことしたあられも無い姿で、手を腰に当てて牛乳を飲んでいたり、

一人は自室で道具の手入れをしたりしている中、中庭で黙々と木刀を振る鰻が居た。

「…ふっ！…ふっ！」

気合と共に吐き出される呼気。

鋭い足さばき、木刀を正眼から上段に振り上げ、真っ直ぐに振り下ろす。

それら全ての動きが一切乱れる事無く素振りの稽古を鰻は行っていた。

これは鰻の日課のような物であり、

今までも類つ面を横殴りに叩く豪雨の時や、足元さえ覚束ないような暴風の時、

雪が脛まで積もった中でも止めた事は無い。

剣術家たる者、日々の鍛錬を怠るようでは刀を振るう資格等無いというのが鰻の持論。

例えその日に手応えが無かろうと、一日を怠る事で一步退かざるよりも遥かに尊いという考え。

その一步の減退は、相手に一步踏み入られる機会を与えるだけ。

そうならぬ為に鰻は今日も木刀を振るう。

風にそよいだ枝葉の擦れる音に紛れ、

鰻から発せられる音もまた、夜の濃藍に溶けていく。

素振りの回数が丁度三百を数えた頃、鰻は静かに木刀を降ろし一息付いた。

「…どうした。何か用でもあるのか？」

ふと、独り言のように口を開く。

すると、中庭から程近い所にある勝手口が「きい」と軋ませながら開き、

おずおずと蛭雪が姿を表した。

「すいません、中々出る機会は窺っていたのですが。今は宜しいですか？」

稽古を寸断させた事に対して申し訳無さそうな素振りをして蛭雪が尋ねる。

「構わん、そろそろ一区切り付けようと思っていた所だ。所で要件とは？」

「要件と言う程では無いのですが…今日のお味噌汁、何か味が悪かったかしらと思ひまして」

「ん？いや、そんな事は無いぞ。私は何時も蛭雪の作ってくれる料理には満足しているし、感謝している」

「あら、それなら安心しました。…となると…あの時眉を顰めた理由は何なのでしょう？」

その言葉を聞いて、鰻はふと息を吹く。

「…なんだ、見られていたか」

「ええ。少し気になりました」

「いや、なんて事は無い。少し気になっただけの事で…」

そう答えて、鰻は蛭雪から視線を外し庭にある木を見る。

蛭雪は鰻が話し出すまでじっと待っていた。

「…狸の源三郎の件なのだが」

「ああ、あの可愛い狸さんですか？それが何か」

「里黄殿の住んで居られる山なのだが…」

あの山に狸は居るなどと私は聞いた事が無くてな。蛍雪は聞いた事があるだろうか？」

鰻の問いに、蛍雪も心当たりが無いと首を振る。

「…此処に住んで短くは無いですが、確かに聞いた事が有りませんね。」

先生に聞いてみればわかるかも知れませんが」

「まあ、恐らく他の山に居た狸が餌を求めてあの山に来たのだろうとは思うが、

少し不思議に思えてな。それだけの事だ」

それだけ聞いて蛍雪は満足したのか、

「そうですか、それなら安心しました。私はてつきり、もっと重大な事でも起きたのかなと思ってしまつて」

「余計な気を使わせてしまったな。済まなかった、先に休んでくれ。風呂場は私が片しておく」

「有難う御座います。それではお先に失礼しますね、おやすみなさいませ…」

と軽く頭を下げた再び勝手口に戻って行った。

その後姿を見送った後、鰻はもう一度前に向き直り、暫し深呼吸をした後に素振りを再開した。

翌日、昨日と同じく雲一つ無い間抜けな程晴れやかな空の下、京一郎と那月は九櫛家の裏手にある蔵の前に立っていた。

鯀は既に道場へと出かけ、螢雪は家で家事に追われている。

那月は何時ものように、来ている服の裾をたくし上げ、

「それじゃあ京一っちゃん。ちゃっちゃんといっちゃんいましょう！」

左肩に右手を置いて、肩をぐるぐると回して張り切っている。

すっかり戦闘態勢だ。

そんなやる気的那月に対して、肝心の京一郎からはあまりやる気を感じられない。

「うーん、早い所片付けたい所だし、前々からやろうやろうとは思ってたけど。」

この中に入っている奴等を相手にしなきゃと思うとね、なかなかどうして腰が引けるんだよなあ」

京一郎はそう呟いて蔵を見る。

九櫛家の蔵は、一般的な家が要らない物、使わない物を仕舞っておくような物置と比べても、

そこそこの大きさの土蔵である。

流石に店で使われるような酒蔵・米蔵の比では無いが、それでも大きい方と言っても差し支えない程の大きさだろう。

ここ数年は仕舞ってばかりで一切整理を怠っている為、こうして片づけをする事になったのである。

「だーいじょうぶ大丈夫。二人でやれば直ぐに終わるって！一人でやるより効率二倍！」

なんの根拠も無いだろう自信を前面に押し出して那月が京一郎に奮起を促す。

「まあそうだな、期待してるから。頑張って」

「おうっ。どんと任せてくれたまへ」

「よし、それじゃ、開けるぞ」

京一郎は右手に持っていた鍵を戸口に掛けられた大きな南京錠に差



し込み、廻す。

ガシャリと音がして鍵が外れ、南京錠を脇に置いて京一郎は片方の戸の取っ手を掴む。

「ん…おいっしょっ！」

全力を込めて引つ張る。戸は蝸牛の歩みのように少しずつ開けていく。

腕の筋肉を総動員し、それでも足らずに体で押していくが、効果は浅い。

「ぐう…那月…。そっちも開けてくれえ…」

傍観していた那月に、頼りない声を出して助力を要請する。

「うーい。んしょっと」

開いてない方の取っ手を掴み、到って普通に戸を開ける那月。

どうにか両の戸が開けられ、中から埃の匂いや湿気を孕んだ様々な古い匂いが一斉に外に放たれる。

その匂いを浴びて、那月と京一郎は眉を顰め、むせる。

「…むはあ…時代を感じる臭い…」

「げぼげぼっ…げぼ」

日の元に晒されて明らかになった蔵の中は、乱雑な状態になっていた。

実際、二人が戸を開けた瞬間にもぐら付いていた箱が一つ転げ落ち、那月の足元にまで転がってきている程だ。

そこかしこに葛箆や木箱が山積みされ、木でこしらえた棚には価値があるのか無いのか解らないような壺や皿が古紙に包まれ重なって置かれている。

雄大が昔に買い集めた蔵書なども埃をかぶって雑に重ねられており、鰯の私物と思われる木刀やらも立てかけてある。

がらくたとしか言えないような物や、古びた反物や着物の類も無造作に置かれていた。

比較的新しい物から、どう見ても歴史を感じる物まで幅広い。そして異質な空気を放っているのは、箱から無造作に伸びている腕や足と思しき物、その近くに置かれている頭部を模ったような土塊。人間の内部を模した物にしては大量の螺子と発条で形作られた不可思議な模型の数々。

硝子瓶には眼球としか思えない球体が、液体に沈んでいる。

何も知らぬ一般人がこの一角を見たのなら、度肝を抜かれるだろう。手足は機人の部品であり、土塊は機人の造形の練習に使われる一般的な練習道具である。

他にも製作過程中に仕事を取り止めになっちゃった物、

「いつか使っくんじゃないか」という理由でここにしまわれている物も数多くある。

二人とも、がつつりと詰っている蔵の中を見つめるままに、微動だにできなかった。

「あゝ… いやあゝ。京一っちゃん。蔵の片付け大変だったですなあ」  
やけに爽やかな顔でやってもいない労をねぎらう那月。

「まだ何にもやってないだろ。今からするの。にしたってこれは凄いな…。」

よくもまあここまで詰め込んだものだよ」

何しろ、気を付けて中に入らなければならない程で、  
周りの物に体の一部でも触れようものなら雪崩が起きてしまうだろう。

「なんかもう蔵ごとよそにやってしまいたくなっちゃうね」  
と那月が言ってしまうのも納得だった。

「蔵ごとって… どうやってさ？」

「こうね…蔵を持ち上げて！ぽい」と

投げる振りをする那月を見るだけで京一郎はお腹一杯になった。

「…まあ出来る物ならそうしたいけどね。とりあえず出来る所からやっていこうか。」

那月、差し当たって床に置いてあるものとかを外に出そう、そこら辺りでいいかな」

と京一郎は裏手の一角を指差し、円を描くようにくると回し指示をする。

「うん。わかったっ」

それから、中にある不要と思われる物を各自外に出して行き、判断のつけ難い物は後で各々の所有者に取捨を選択して貰う事にした。

京一郎と那月はそれぞれ蔵の物を持ち出し、

あーでもないこーでもないと言いながら手頃な場所に置いて行く。

次第に周囲にも生活の音が目立ち始め、遠くで威勢のいい物売りの声も聞こえてきた。

幾らか蔵の中がすっきりし始め、置き場所にした所にも大分物が増えた頃、

「んしょっと…。んゝなんかあれだね、捨てるの勿体無くないかなあ」

と急に那月が言い出した。

この言葉に反応して、京一郎は少し考える。

確かに、これだけの物を捨てるとなると流石に勿体無い。

中には値打ちのある物も含まれているかもしれない。

でもそう言い出したら捨てられないし、又出したのを蔵に入れたら何の意味も無くなってしまう。

九櫛家の人間は、物を大切にするという大事な考えを持ってはいるが、

差し替えると要らない物でも大事に抱え込んでしまおうという言葉にも当てはまる。

案外こういった手合の物は、捨ててしまえば使う機会等来ない物なのだ、

瓦版の「賢い暮らしの生活術」という婦人向けの記事で読んだ事がある。

考えあぐね、一つ打開策を思いつく。

「！そうだ、今度骨董市にでも出品しようか。

そうすればこの中ももう少し片付くだろうし、売ったお金で新しい道具も手に入るだろうしね。

それに、他に必要としてくれる人が持つてくれた方が無下に捨てるよりいいよな」

九櫛家より少し離れた広場で定期的に行われる骨董市は、

京一郎達が住んでいる周辺の地域の人たちも参加する大がかりな催事である。

年に数回程不定期ながら開催されており、その度九櫛家の面々も出かけて行つては

目に付いた物を買つたりしていた。

「じゃあじゃあ！もつと値打ちがある物も探そうよ！」

その言葉を聞いてより一層やる気に拍車がかかる那月。

「…？なんか目的が変わつて来ているような…？」

小首を傾げる京一郎を尻目に、那月は鼻をくんとひくつかせて、那月はそびえ立つ一つの山を見上げる。

「むむ、この上の箱にお値打ち品の香り！…とうっ！」

と何を嗅ぎ分けたのかは知らないがぴよいと飛び上がり一番上の箱を手に取る。

「お、おい…那月。そんな適当に触っちゃ…」

どうにも危なっかしいので注意しようと京一郎が近づいた時、

「え？」

「お？」

那月が無造作に触れた事により、ぐらついた山は崩壊し、雪崩が起きた。

その雪崩は、まるで狙い済ましたかのように逃げる暇も与えないまま京一郎の元へ。

「うわああああっ！」

ドサドサドサッ！

大量の埃を撒き散らしながら、京一郎の姿は無くなり、代わりに一つの大きな山が出来上がった。

「きよ、京一っちゃん！京一っちゃん！」

慌てて駆け寄る那月。

暫らくした後、箱から飛び出した着物や古書等で作られた山から、もぞもぞ京一郎は這い出てくる。

「良かった！生きてた！」

那月は歳相応よりも豊満な胸に手を置き、ほっと安堵した。

「殺さないでくれよ、痛たたた！那月、もうちょつと落ち着いて作業してくれると有り難いんだけど」

「あ、あははは…御免なさい。あ、こ、これ！片付けるね」

謝った後、所在無さに雪崩で築き上げられた山を見て、片付けようとする。

山を持ち上げた際、その手から何冊かの本が落ちて那月の足元に開かれる。

見た目にも相当古びた本で、そこかしこが日に焼けていた。

「なんか古い本が出てきた！なんだろこれ」

「…よいつしょ。ん？」

どうにか這いずり出た京一郎が、その本を掴んで空いた空間にへたり込み、中身を読む。

「ああ、これはこの辺りの史実を纏めた冊子…かな？それにこれは…図鑑？動物の図鑑みたいだ」

「こういうのって一度読み始めると止まらないよね」

那月も京一郎につられたのか、京一郎が持った以外の本を拾って読み始める。

「わかってるなら読み始めないでくれ。そして読みふけないでくれ」  
「…おー！たぬきそば！」

ぺらぺらと冊子を捲っていた那月が嬉々として指を差す。

「？たぬきそばって…何だ？」

よろと立ち上がり、顔を伸ばして那月の横から覗き込む京一郎。

那月が指し示した先には一匹の動物の絵柄が描かれており、その周囲を覆うようにその動物を説明していると思われる字が書かれていた。

「ああ、そうか。この辺りに生息していた狸の事が書かれてるな。

って蕎麦を付けるな蕎麦を」

その絵柄は確かに狸としか言い様の無い物であったから、京一郎も狸と認識した。

しかし、その周囲の文字が難解な文字を使っている為、読む事が難しそうだった。

「何々…？ちよつと字が難しすぎて読みづらいな」

「ふっふーん…私読めるよ？」

「ええっ！？…本当か？」

心底意外と言った顔をして京一郎は那月を見る。

「ん？…なんか京一ちゃん、失礼じゃない？」

心外そうな顔をしてぶーつと頬を膨ませる。

「ごめんごめん、じゃあ、この辺りはなんて書いてるんだ？」

「えつとね…えつと、

『白銀貉は、鹿縞山にかつて生息していた貉の一種也。

生きては並の毛色であるが、死した後加工すれば、艶やかな銀を放つ宝と変わる也。

その為、愛好品として価値が生まれ、

【白銀貉は化け貉化けて黄金と変わりなむ】

という言葉が実しやかに作られた程也。

その姿、毛皮に化ければ雅な装飾具として華人を彩らん。

その姿、筆に化ければ美しき筆跡を残す弘法も欲する筆にならん。

血肉は長寿の礎ともされ、時の者達はこぞって白銀貉を欲しがり…  
狩った也』」

つらつらと読み上げる那月。だが、

「貉？でもこの絵は狸が描いてあるけど…それに鹿縞山って何処？」  
この部分に疑問を感じていた。

「狸は、昔は貉って呼ばれてたんだよ。明確な線引きもされてないし、今でも貉って呼ぶ所もあるんだ。

鹿縞山って言うところ…お郷さんと里黄さんが住んでいる辺りの山の事だな」

と京一郎が答える。

この本に書かれている事は、鹿縞山に居た白銀貉という動物の存在。そしてそれが非情に価値があるが故に、人が乱獲に乱獲を重ねたという事だった。

那月は続きを読む。

「『…だが白銀貉は最後の变化をし、二度と人前に現れる事無く鹿縞から姿を消した也。

人ならず機人も理を見ず、狩ったが故の必然也』」

ようやく全てを読み上げた所で京一郎が話し出す。

「白銀貉は絶滅したって事か…」

那月も少ししんみりとした顔をしていた。

流石に、昔の話とはいえ楽しい表情になれるものではない。

「昨日京一っちゃんが話していた狸がその狸だったらいいのにね…」と儚い希望的観測を望む。

「源三郎の事か…そうだな、せめて一匹でも…居てくれたらいいよな」

「うん、そうだね。居なくなるって、寂しいもん…」

那月はまだしんみりとした顔をしていた。

なんとも湿っぽい雰囲気になったのを払拭するため、京一郎が勤めて明るい声を出す。

「ま、まあさ！積もる話もあるけど、それよりこの積もった物を片付けようぜ！

働いた後に食べる蕎麦は美味しいもんな。今日の夕食が楽しみだ」  
那月は黙ったままだったが、少し顔を上げて京一郎を見る。

「…京一っちゃん」

「ん？どうした？」

「蕎麦も良いけど、一緒に食べるお稲荷さんも格別だよ？」

「はは、そうだな」

「えへへ…よし、張り切って片付けちゃおう！おー！」

少しだけ場の空気が和らぎ、二人は又あーでもないこーでもないと片付けを始めた。



## 第一話　白銀猪２

京一郎達が蔵の片付けに一段落を付けて休憩をしている頃、鹿縞山麓の畑では機人の里黄が畑仕事に勤しんでいた。

先日の治療のお陰で腕も京一郎のお陰で元通り以上になったし、うっかり空けてしまった穴も埋めた。

これで収穫に本腰を入れて取り掛かれるという物だ。

作物の収穫時期にしっかりと収穫を行わなければ、

それだけで作物の味は美味になり、見た目も不必要に大きくなったりと値段が下がる一因となる。

作物を作る以上、相手に出来るだけ美味しい物を食べてもらいたいというのは

農家を営む者なら当然の心理と言えるし、それで収入も上がるのな  
ら言つ事無しと言える。

…が、時折ふと顔を上げて鹿縞山へと向かう道の辺りを見つめる里黄。

源三郎の事が気掛かりなのだろう、集中しようとは思っている物の身が入らない。

昨日の深夜、何時ものように鹿縞山へ少し入った所に食べ物置いてから眠りについた。

朝にその場所に向かったが何時ものように手を付けたような痕跡は見られなかった。

あったとしても、山鳥がついばんだり、他の小動物と思われる痕跡

が残っていただけだった。

里黄は落胆したものの、今度こそはと昼前に再び食べ物を置いたのだが、

今度は食べてくれているのかが気になって仕方が無い。

やはり、あの時地面に穴を空けた事に驚いてしまい、

怖がって近寄る気を無くしてしまったのでは無いかと里黄は思っていた。

元々狸という者は人に懷かず、臆病な気性であるから仕方が無いとはいえ、

以前は出て来て来ていた隣人が現れないという事が気掛かりになるのは当然だろう。

どうしたらよいものか…と考えながら作業をする里黄。

…ふと自分を見ているような視線を感じて、里黄は顔を上げる。

すると、草を掻き分けて、ぴよこんと顔だけ飛び出させた二つのつばらな瞳が里黄を見つめていた。

「…っ！」

その瞳と目が合った里黄は息を呑み、持っていた野菜を落とした。ごろりと転がる野菜を見もせず瞳に釘付けになる。

見間違えるはずが無い、顔を出していたのは源三郎だった。

源三郎は珍しくご丁寧にも空になった皿を啜えて、里黄の目の前に現れたのである。

源三郎なりに、里黄の腕の原因が自分にあつたという事を理解していたのだろう、

気まずさと申し訳無さで出てこれなかったのかもしれない。

それでもご飯を置いてくれた里黄にお礼をする為にこうして現れたのである。

「げ、源三郎！」

里黄の声に反応するかのように、

源三郎はがささと草むらから出てきて、ひょこひょこと里黄に向かって歩き出した。

「し、心配したんだぞ！？姿を見せてくれなかったし、てつきり居なくなつたのかと…」

それきり言葉にならず里黄は空気を吐いていた。

日数にしてそれほど長い間合っていない訳では無いが、別れ方が別れ方だったからこそ、

里黄は一日が何日にも長く感じていたのだろう。

源三郎はそのまま里黄の足元にまで近づき、皿を地面に置いた。

そして、里黄を見上げ長い綺麗な尻尾をぱたぱたと振る。

空になった皿に目を移し、里黄は顔を綻ばせる。

「そ…うか…そうかそうか！全部食べてくれたかあ！まだお昼の残りがあるけど、食べるか！源三郎」

しやがみこんで源三郎に問い掛ける里黄。

その問いに、源三郎はきやんと一度鳴いて答えた。

## 第一話　白銀猪

「きよ…京一っちゃん」

「な、なんだよ那月。変な声出して」

九櫛家の蔵では、相変わらず蔵の片付けが行われていたが、少し様子が違っていたのは、

那月は縁側でのべーと真夏に食べ残した素麺のように延び切っていた事。

「うはゝ。一度落ち着いちゃうとこのまったり感から逃げられませんなあゝ」

「はあ…だから止めといた方がいいって言ったのに…」

蔵の片付けは、那月の頑張りもあってかどうにか様になる位までは進んだ物の、

それでも終わりまでは一つどころか二頑張り程必要だった。

だというのにこのような体たらくになっているのは、

蛭雪から午後のお茶にしないかという甘い罠の為だった。

もう少しやってからと断ろうとした京一郎を振り払い、

まんまとその誘いに引っ掛かった那月は、その罠から抜け出せずにいた。

生半可に休憩を挟むと、改めて作業を開始する踏ん切りが付かなくなる典型的な悪い例と言える。

「しよつと…まあ、那月はもうちょっと休んでいいよ。

とりあえずは那月のお陰で大分はかどったしね」

「ありがとゝ京一っちゃん。いつもすまないねゝ」

「はいはい、それは言わない約束でしょと…」

そんな二人のやりとりに、しゃがれた声が割り込んできた。

「なんじゃい、折角のお天道様の下だというのにだらっとしおって」  
その声に那月はがばつと顔を上げ、京一郎も振り返る。

「あ！せんせー。おかえりなさい」

「おう、今帰ったぞい。那月や」

声の主は小柄な老人だった。

歳相応に皺は刻み込まれている物の、顔中から生気が満ちており見るからに快活そうな顔立ち。

目の輝きは少年のように澄んでおり、太い眉がさらに老人の豪快さを表しているかのようにきりりと揃っていた。

腰も曲がっておらず、下手な若者よりもぴんと真っ直ぐに立っている。

一本の黒髪も無い豊富かつ長い白髪は後に撫で付けられており、同じく長く真っ白な髭は洒落っ気なのか、那月と同じ色の髪留めで先の方を結んでいる。

京一郎と似た形の作務衣の上にちゃんちゃんこを羽織り、本人と同じ位の寸法の行李を容易く担いでいた。

そして、右手には九櫛と書かれている手甲がはめられている。

機人師「九櫛雄大」のご帰還である。

「蛍雪さーん！蛍雪さーん！せんせーが帰ってきたよー」

その声を聞いて、家の奥から蛍雪も出てきて深々とお辞儀をして雄大を出迎えた。

「おかえりなさいませ。先生」

「爺さん、おかえり。随分と時間が掛かったみたいじゃないか」  
皮肉めいた口調で蔵の荷を地面に置きながら京一郎がねぎらう。

「いやいや、なかなかどうして。店の女子がこぞって儂を離してくれなくてのう。」

どうにか慰めて帰ってきたらこの時間だ。いやいや困った物だわい…… かつかつ……」

さも愉快そうにからからと笑う。

「よっ！女泣かせ！」

「あらあら……先生も罪な方ですね」

すっかり真に受けた風な二人を見ながら、京一郎は雄大に対して呆れたような顔をする。

「ったく。良く言うよ……」

「なんだい京一郎、嫉妬とは若造らしくないの。不健全極まりないぞ」

「あ、あのなあ……いや、もういいよ……。それより爺さん、後でいいからあの中から要らないのと要るの分けといてくれないかな。蛍雪さんもいいですか？」

「あ、はい。わかりました京一郎さん」

にこりと微笑みながら答え、縁側にある草履を履いて庭に出てくる  
蛍雪。

雄大はどさと行李を降ろしながら、

「そつえば、鰻は居らなんだか？」

と誰とも無く問い掛ける。

「ええ、今日も稽古に行かれました。帰ってくるのは……後二、三時間程かかるかと思えますよ」

「ふむ、そうかそうか……おーおー。蔵の片付けか、随分と懐かしい物まであるのう……」

懐かしそうな顔をしながら地面に置かれた品々を見回す雄大を見て、

「あつ、そうだ！せんせー。これ見てっこれっ」

何かを思い付いたようで那月は縁側から跳ね起きた。

本を掴んで先ほどの白銀貉が書いてある箇所を開き、雄大の前に差

し出す。

「ん？これは…背中に二本の白毛の狸…白銀貉ではないか。随分と古く懐かしい物を…これがどうしたというのだね？」

「ああ、それは」

と、蔵の荷を持ったまま京一郎は事の顛末を話した。

「ふうむ、なるほどのう、そう言うことが」

長く蓄えた髭をさすりながら、雄大はなにやら思索していた。

「せんせー。私は源三郎が白銀貉だったらいいなって思うんだけど、せんせーもそう思うよね？ね？」

期待を膨らませた目で雄大を見つめる。

「まあ…う…那月がそう思いたいのも仕方が無いわな。だが源三郎が白銀貉かどうかは儂にもわからんよ」

「え…」

予想外の答えだったのか、落胆した顔をして落ち込む。雄大の事だから、自分の考えに賛同してくれる物と思っていたのだろう。

その様子を汲んだ雄大は慰めるかのように手を伸ばし、那月の頭にぽんと手を置きながら、

「ほれ、それくらいでがっかりするでない。白銀貉が居なくなったとは儂は思っておらんよ。」

源三郎とは別の狸が、それこそ白銀貉が今でもあの山で人知れず暮らしている事だって十二分にありうるわけだろうしのう」

「な、なるほど！なるほどー！」

なにやら感銘を受けたのか、うんうんと頷きながら妙な興奮をしている那月。

「ただと爺さん、その本にはもう居ないって書いてあるけど」

「ん？なあに。単純な話、居なくなっただけなどと言っても所詮人間が調べて書き連ねただけの事。」

全てを知った振りをするのは簡単、だが世の中そう人間の都合の良  
い様には出来て無いとも僕は思うがね…あーいやいや、それにし  
ても小腹が空いたの。蛍雪や、昼の残りでも構わんから何か食べさせ  
てくれんかね」

「はい、わかりました。あ、そういえば先生、今日の夕食は外で頂  
こうと言う事にしようと思っていたのですが、宜しいですか？」

「ほう、外食か。…丁度実入りのいい仕事もしたしの。今日は僕の  
驕りで、たとと食べるがいい」

「わーい！」

諸手を上げて喜ぶ那月。

那月に釣られて蛍雪もくすくすと笑う。

が、それと同時に九櫛家の門の前に人が立っている事に気が付いた。

「あ、あの。九櫛さん、すいません。そそ、速達です」

どもりながら要件を告げる男は郵便屋だった。

「あらあら、いつもご苦労様です」

蛍雪が受け取りに行き、緊張で顔を赤くした郵便屋は馬鹿丁寧にお  
辞儀をしてぎくしゃくとした動きで帰っていった。

蛍雪を初めて見た男性は、大抵こういった反応を見せる物だ。

「これは…先生宛てのようですね」

戻って来ながら蛍雪は封の表を見せる。

そこには「九櫛雄大様へ」と書かれていた。

「ほう、儂宛とな。しかし恋文とはまた古式ゆかしい女子だのう…。

かつかつか、もてるというのも考え物だわい」

機嫌良さそうに封を開け、手紙を読み始める雄大。

だが次第に、顔がどんどんと真剣な顔つきになっていった。

「…京一郎や、悪いが僕は蕎麦屋に行けそうに無いの」

「え？なんでさ」

「仕事じゃ…早急にとの事らしくての」

手紙をひらひらとする雄大。



「えゝ！そんなあ！」

「悪いのう那月。これで儂の分までたんと食べて来ておくれ」と済まなそうに那月に懷から取り出したお金を渡す。

「先生、それではもう差出主の所へ向かわれるのですか？少し体を休まれるか、せめてお食事をなされた方が……」

心配そうに螢雪が尋ねるが、雄大は首を振った。

「いや、直ぐにでも向かわねばなるまい。流石に宵越しの仕事にはならんと思うしの。」

小腹はそこいらで適当に満たすとするわい」

さつき降ろしたばかりの行李を再び担いで雄大が家を出て行くとする。

その背中に向かつて京一郎が、

「爺さん、俺も行つた方が……」

と声をかける。が、

「なあに、京一郎の手を借りるほど耄碌もしとらんし疲れてもおらん。それじゃ行つて来るぞい」

あつさり断つて出かけて行つた。

「はい……行つてらっしゃいませ、先生」

螢雪がうやうやしく見送る中、少し寂しそうに京一郎と那月はその背中を見つめていた。

「あゝあ。行っちゃった……なんだか忙しそうだねせんせー」

「うん。爺さん、随分深刻そうな顔してたけど、大丈夫かな……」

「そうですね、大事でなければ良いのですが……」

## 第一話　葛美織

しばらく後、雄大が訪れた先は古めかしい木造の建物だった。

建物の入り口には古木を看板にした物が掛かっており、

そこには達筆な文字で「葛美織」と書かれていた。

建物の周囲を取り囲むようにのぼりが立てられ、風にはたはたとなびいている。

その一本一本に舞子達の名前と顔絵描きが施されていた。

夜になり本格的な営業時間に入れば、技師に特別に作らせた照明装置によって周囲は照らされ、

まるで歌舞伎等の興行を行う会館を彷彿とさせるような一層目に付く外観となる。

葛美織は、一階から二階までが客間として機能されており、

職業性別人機人を問わず様々な人達が日常のせせこましさを忘れる為、

酒と舞、三味線や歌声、団欒と笑いに満ちた憩いの一時を過ごしにやってくる。

雄大は少しだけ目を伏せて店の門を潜り、続いて暖簾を潜る。

すると一瞬にして世界が変わった。

店内に置かれている調度品の数々は、煌びやかでありながらも下品さを感じさせない内装になっている。

更に店内には香木が焚かれ、ほのかに香る艶やかな匂いは疲れた心をときほぐし、

穏やかな心持ちにさせる物だった。

当然の事ながら店が賑やかになる時間としても早い為に、店内は客

が数人程しか居ない。

夕酒を飲めるような気楽な仕事に付いているのだろうか。それとも  
そういつた渡世の者達なのか。

差し当たつて雄大は近くに居た使用人に手紙を見せ二言三言会話を  
交わすと、

とりあえずの形で一階の奥の席を薦められるが、それをやんわりと  
断つて入り口近くの接客台へ座る事にする。

接客台の中央辺りには既に一人の男が座つて酒を飲んでいた。

男の後ろには荷物なのだろう、大きく丈夫そうな袋が置かれている。  
流石にこれだけ空いている席がある中で、その男の隣に座るとい  
うのもなんなので、

男の席から二つ程離れた席にその男と同じように行李を席の後に置  
き、座つた。

使用人に注文した焙じ茶と粕漬けを堪能しながら、再度使用人に呼  
ばれるまでの間を店の雰囲気を楽しむが待つ。

その時、焙じ茶の香ばしい香りと粕漬けの癖のある香りに混ざつて、  
この場に似つかわしくないような匂いを感じ取つた。

動物と山、そして血の匂い。

わずかだが、鼻に刺さるこの匂いの元を辿ってみると、直ぐにその  
正体に気がついた。

その匂いを発しているのは、接客台に座つて酒を飲んでいた男から  
発せられている物だつた。

その男に気付かれ無いようにちらと横目にして見る。

着ている服にしてもそうだが、見知つた顔では無い為この辺りに住  
んでいる者では無さそうだつた。

大柄で、体格や肌の艶からして三十前後と言つた所に見えるが、髭  
を生やしていたので正確な年齢は計れなかつた。

顔付きは肉食獣を思わせるような印象であり、真一文字に結ばれた唇や、

鋭く真つ向から見据えている目付きからして、

その男がまともな渡世を渡つては居ないと言う事はわかる。

大体、このような匂いを放ちながらこういった店に来るような者は珍しい。

そして何より、その男の後ろ。

この大きな袋から匂いが出ているように思える。

雄大も気にはなったものの、これ以上は相手方にも悪いと思い視線を戻して茶を飲むことにした瞬間、

肩を優しく叩かれた。

ふと振り向くと、一人の女性がにこやかな笑顔で立っていた。

「いらっしやいませ、九櫛様。今晚は…には少し早いかもしれませんね」

「おお、千早殿。今日も又一段と綺麗じゃのう」

うやうやしくお辞儀をする、薄化粧を施し霞桜の和服を着たこの舞子を見て、

一つ感嘆の溜め息を付いてから挨拶を返す。

「ふふ、有難う御座います。それにしてもなんだか珍しいですね。

昨夜に続いて今日もいらっしやるなんて」

「なあに。おんしの顔を見たくての、こうして来た訳じゃて。まっこと眼福という言葉はこの店の為にあるような物だわい」

にかつと歳不相応な白い歯を出して世辞を吐く。

「あら、相変わらずお上手ですね」

口元に手を置いてくすくすと上品に笑う舞子の後ろから、

着物を相当際どい部分まで着崩し、肩に見事な襟巻きを纏っている  
機人の舞子が顔を出した。

「雄大ちゃん！」

と、色めいた声を出す。

流石にこれには雄大も鼻の下を伸ばさずには居られなかった。

「おうおう。いやー！実に見事な襟巻きじゃのう鯉邑。頂き物かね  
？」

「ええ、先日ずっと鼻屑にしてくれるお客様が、私にって言ってく  
れたのよ」

と見せびらかすようにひらひらと襟巻きを回す。

「ふむ、それだけの物、さぞかし高いだろうに。それだけ惚れ込ん  
でおるといふ何よりの証だのう」

「んーでもねえ……」

「？どうかしたのかね。その襟巻きが嬉しくないのかね？」

この問いに千早が困ったように答える。

「いえ。鯉邑さんだったら『どうせなら白銀貉の毛皮を頂戴な』なん  
て仰るんですよ」

「ほっほう！それはまた随分と思い切ったおねだりをしたもんじゃ  
のう」

「だって、私が一番綺麗って言ってくれてるんだから、私をもっと  
綺麗にしてくれなきゃ。

あゝあ、白銀貉をくれたらなんだってするのにな。やっぱり毛皮  
っていったら白銀貉ですもの」

厚かましくともさえ聞こえる口調で鯉邑は続けた。

「なんなら鹿縞山にでも行って取ってくればって言ってみても面白  
かったかもしれないわね」

「またそんな……手に入れようって言つのならそのお客様は破産して  
しまいますわ。」

実際お客様も大分目を白黒させていらっしやいましたし……」

困惑する千早を宥めつつも、雄大が割って入る。

「まあまあ……しかし今日はその名前が耳に入る日じゃのう。孫達もそんな事を言っておったわ」

と雄大が言い掛けたところで、離れた席に居た男が立ち上がり、台に幾ばくかの代金を置いた。

重そうな袋をいとも簡単に担ぎ上げ店を出て行く。

「あつ、又お越し下さいませ」

その背中に色づいた声を掛ける二人。

だが男はその声も聞こえなかったかのように姿を消した。

「随分と……愛想悪そうなお客さんだったわね」

「ええ、先ほどもお酌をして差し上げようと思いましたが、頑なに拒まれまして……」

男が出て行った入り口を見つめる二人に賛同しようと雄大も口を開きかけたが、

近づいてくる使用人に気がついて口を閉ざした。

「九櫛様、用意はもう直ぐ整いますので、舞波の間にもう暫しお待ち下さい」

「いやいや。急かす事無きようにして頂きたい。さて、儂はそろそろ失礼させて貰うよ」

使用人のその言葉を聞いて椅子から降り、行李を背負う雄大。

「あ、はい。私達も支度をしないと、さあ行きましょう鯉邑さん」

「はいはい……雄大ちゃん。今度はお孫さんも連れてきてね」

ひらひらと手を振る鯉邑に返事をしながら、雄大はゆっくりと階段を上がって行った。

一階を上がり、二階へと向かう。

そして更に、三階へと上がり始める。

葛美織の三階を利用する客は主に富裕層の人間が多く、所謂選ばれた人間のみが入る事の出来る領域とも言える。

お偉方がこの町に訪れた時には必ずと言って良いほど用いられる。

その領域に幾度も足を踏み入れている機人師は、言われた通りに舞波の間と書かれた部屋の襖を開け、中に入った。

### 葛美織の三階。

廊下を豪奢としか言いような無い呉服を来た一人の女性が歩いている。

日の光を浴びて透き通る程に美しく煌く白銀の髪。

相当な値打ち物であろう、つげの櫛が刺さっては居るが、この髪にあつては寧ろ邪魔と言えるほどに見劣りしている。

その御髪に負けじと淡雪を思わせる程に白い肌。

整った鼻梁、紅紫にも蒼紫にも映える眼。

そして対照的とも思わせる口に塗られた真紅の紅がより彼女の美しさを引き立たせていた。

その佇まいだけでも、周囲の空気を変える程の存在感を放ち、正に怖気を覚えるほどの美しさを有している女性であった。

その女性は舞波の間と書かれた部屋の前で止まり、しやなりと座る。

「お待たせ致しました。雄大様、柚紗で御座います」

柚紗は、葛美織において筆頭の舞子を幾十年も続けている機人で、文字通り葛美織の看板である。

この美しさに骨抜きにされ、嘗て彼女に入れ込む余りに国を傾かせた将も居り、

「国傾の柚紗」という異名が通った事もあった程である。

襖に手を掛け、そろりと開ける。

…すると、開けた先には土下座をしている雄大が居た。

雄大は、柚紗が現れるより前から手を畳に付け、頭を畳に擦り付け深々と土下座をしていたのである。

いきなりの光景に、柚紗は近寄り問い掛ける。

「雄大様。お顔を上げて下さいまし。何故そのように頭をお下げに…」

しかしその言葉にも雄大は動じず、畳から額を離そうとはしなかった。

「…柚紗様。某も、機人師として生まれ七十と二年。僭越ながらそれなりの仕事をして来た自負が御座います。」

されど、この度の早急の申し付けは機人師としての某に不遜があったなればこそ。

お許しがあるまではこの頭、上げるわけには参りませぬ」

かしこまった言葉遣いで話す雄大に、柚紗も困惑していた。

雄大は、今回呼ばれた事を己の不手際による苦情だと思っていたのである。

柚紗はすぐさまそれが心外である事を告げた。

「それは違います。先日施していただいた事は何一つ非の打ち所も有りませんでした。」

それに私はお咎めを申す為にお呼びしたわけでは御座いません」

懇願にも近い柚紗の呼び掛けにも、雄大は答えなかった。

「…」

「…雄大様…」

「…いや…」

「…？」

「いや…実はですな、参った事に…頭を上げる機会がなかなか見つ



からなくての……」

頭は下げたままだが、何時も通りの口調になった事に袖紗は少しだけ表情を崩す。

「いえ、頭を上げて下さいませ。本当に申し訳御座いませんでした。番頭さんが慌ててあのような手紙を出してしまいまして。急に御呼び立てをしたばかりか、説明も無いばかりに」

ゆつくりと頭を上げ、照れたような顔をして雄大は笑う。

「いやいや、袖紗殿もお人が悪い。僕はてつきり、

金輪際九櫛からは依頼をせぬと三行半を突きつけられるのでは、と冷や汗が出ましたわい」

「そんな。そのような事は御座いません」

「いや、となれば一安心じゃわい。しかして、今回はどのような案件ですか？」

「……実は雄大様にご相談したい事が御座います。その前にまずはこれを」

袖紗は、袱紗に包まれた物を丁寧に雄大の前に置く。

その厚さからして、相当な金が入っていると思われるそれを見て、雄大はその意味を問い掛けた。

「これは一体……」

「僅かばかりですが、私の気持ちです。ご相談料として受け取っていただければと」

その言葉に少し考えるような素振りを見せた後、雄大は静かに包みを袖紗の前まで押し戻した。

それを見て、袖紗は少しだけ眉を潜める。包みを持ち、懷に戻す。

「僕が言うのも何ですがの、

仕事を請け負ったというのならば失礼無きよう受け取ります。

ですが相談事というのならばこのような金銭のやりとりなぞ無しにして、ざつくばらんに参りましょう」

「ですが…私は…」

その提案には承服しかねるらしい。

お願いをする側としては、何らかの形で感謝の印を示したいのだから。

雄大もその気持ちを汲み取ったのか、一つわざとらしい咳をする。

「ならば、一つ頼みごとをしても宜しいですか？」

「はい。私に出来る事ならば如何様にも。なんなりとお申し付け下さい」

「うむ。ならば、握り飯を頂けますかな？」

「え…お握り、で御座いますか？」

流石に予想外の事を言われたのか、微かだが驚いたような声を出す。

「少々小腹が空いてしまいましたてな、いやはや申し訳ない」

腹をさすつてとぼけたような口調で話すと、

腹もそれを見計らったかのように「くっつ」と情けない音を立てた。それを聞いてくすと笑いながら、

「わかりました。それでは用意させて頂きますね」

と雄大の頼みを了承し、襖を開けて顔を出して使用人を呼ぶ。

すぐさま使用人が現れ、柚紗と言葉を交わして階下に降りていった。

「いやしかし、相談事とは珍しいですな。儂のような者に相談なさつても

お力になれるかどうかわかりませんが…」

この店の慣習として、筆頭を努める舞子は、店側の範疇内であるのならなんであつても自由が利くという権利が与えられる。

葛美織の舞子は店と定期契約をしている機人師が担当をする決まりだ。

柚紗が要求した物は、「自分は専属の機人師を付けて欲しい」という事の一点だけだった。

そして柚紗はこの数十年、数多の新しい舞子が来たとしても、常に筆頭を譲らずに務めていた。

やはり彼女の所作の優雅さ、心遣い、男性のみならず、女性さえも嫉妬心を抱く気も起こさせずに虜にするその容姿や声色。

所謂作られた顔であつたとしても、宿した心や振る舞い方によって機人はいかようにもその顔貌を変える物であるし、見る物にしたら、そのような醜悪な心を持つ機人は醜く見えるものである。

それが無いからこそ、彼女は筆頭を務める事が出来ているのだろう。

そして、彼女は常に専属の機人師として九櫛雄大を指名し続けた。

それは機人師としての雄大の技術を買っている為、というのが理由であると言つのが通説だった。

兼ねてより女人の機人に置いては一目置かれていた為でもある。

彼女の専属の機人師になりたいという申し出は後を絶たずに国中から殺到しているのだが、

それら全てを断っている。

雄大を呼び付ける際の用事は「診て貰う」という事が主で、

今回のようにただ相談事をしたいからという理由で呼ばれるという事は今までに無かった事だった。

「…して、その相談事というのは一体どのような物なのですか？」

使用人が持つてきた握り飯を頬張り飲み込んだ後、本題に入るよう促す。

柚紗は一つ頷いて、話を切り出す。

「雄大様は嵯峨の玉響様をご存知でしょうか」

「ほう、あの玉響殿ですか」

玉響とは、この町から彼方にある『都』近くの嵯峨町に住んでいる、国でも指折りの資産家である。

事成金趣味という言葉が良く似合う男であり、一時は何かと瓦版でも特集を組まれていた物であった。

彼の資産を駄菓子で換算しようとした那月が知恵熱を出したのはまた別の話になるが。

「以前からその玉響様から身売りの話を頂いておりまして」

雄大の眉がぴくりと浮かぶ。

「ほう…」

「玉響様はこの部屋に埋まるほどの金を用意すると仰いまして…お話は勿論お断り致しております。私には勿体無い話ですので」

部屋を見回して雄大は呆れた顔をした。

「ふむ…それは賢明な判断でしょう。玉響殿も、金を積み重ね置くのは自分の前と金庫の中だけにして置けば良いのに…」

何であろうと惚れた女の前に置いてはなりません。それで」

「はい、幾度もそのような事が有りまして、私も頭を下げ続けていたのですが…昨日玉響様からお手紙が届きました…」

そこに書いてあった文を要約すると「葛美織の権利を買い取る」という文章が書かれていたとの事。

玉響はこの店ごと手に入れようと言う算段らしい。

身売りを受け入れなければ店ごと所有してやろうといういかにもな考えだった。

「今までも、このような事を仰る方は居りました。その度になんとか説得させて頂いて、諦めて頂いていたのですが…。玉響様は頭を縦に振っては下さりません。もし玉響様の要望通り事が運んでしまいますとお店の皆様にご迷惑をかける事になります。ですから…どうしたら良い物かと…」

「成る程のう…この店を買い取るとなると一体幾らかかるのやら見当もつかんのう。そんな話を孫達が聞いたらひっくり返るわい」  
髭をさする雄大。

「ふふ、京一郎さんは、お変わりありませんか？」  
「ん？うむ。お陰様で息災ですわい。が、まだまだ肝心の腕の方はひよっこ以前ですな。」

それよりも、玉響殿の件ですが、どうやら玉響殿は本気の御様子のようなのだ。だが、御屋形様は何と？」

御屋形様とは葛美織の所有者兼経営主を務めている者の事である。  
「ええ、玉響様の御屋形様には一番に手紙を見て貰いました。すると手紙をちらと流し見てから丸めて七輪に…その火で煙管を吸って居りました」

雄大はそれを聞いて目を丸くした後、高らかに笑い出す。  
その声は階下にまで届き、店員達も何事かと訝しげに天井を見つめていた。

暫らく笑いは止める事が出来ず、その間柚紗も雄大を何かの感情を含めたように見ている。

笑いも止まり、再び雄大が話し出すまでに正味一分近くもかかった。  
「はっはっはっ…あゝいやいや。流石は御屋形様じゃ。」

しかし御屋形様がそのような態度を示した以上、何があるかと玉響

殿の企みは絵空事となって消えるでしょうな。

これは心配なざる事は皆無ですな。例え国主が要請したとしても御屋形様は同じ事をなさるでしょう」

と雄大は安心して貰おうと念を押した。

「私もそう思つては居るのですが…。玉響様はどのような手段に出るかわかりません…。

もし…もし、私がこの店から出る…という事が起きてしまったらと思つと、

居ても立つても居られず、つい雄大様にもと…」

「いやいや、そのような時に儂の事を思い出して頂けるのは機人師として恐悦至極。

勿論儂としても、柚紗殿とこうして接する機会が無くなるのは寂しいですからな。

老い先短いこの老人の僅かな楽しみを奪われないよう、この身体に鞭を打つてでも守らせて頂きますぞ」

「…」

「ん？どうかありませんでしたかな？」

「いえ…何でもあります…それを雄大様のお口から仰つて頂いてとても安心致しました」

「いやいや、儂程度の言葉で安心して頂ければ幸いじゃて。

…済みませぬが柚紗殿。少し席を外させて頂きますぞ」

と、そそくさと立ち上がり部屋を出て行った。

恐らく、廁だろう。

一人残された柚紗は、少し俯き加減に顔を落とし

「機人師………それだけで………御座  
いますか……」  
すつきりとしたような、それでいて何処か思いつめたような顔を  
して呟いた。

## 第一話　山蝗

太陽も徐々に沈み始め、街並の雰囲気も昼下がりの賑わいから夕方への賑わいへと変化していく。

時間にして午後の六時になるうかという頃、この大通りはこの位の時間になると人の姿も数多く見られる。

様々な店が立ち並んでいる為、大抵の物はここに来れば不自由はない。

惣菜を買い求める若い男性。

威勢の良い声で客を呼ぶ恰幅の良い肉屋の主人。  
街をあちこちと警らしている警官。

仕事帰りなのだろうか、打ち合わせめいた事をしながら歩く二人連れの若い男と機人。

生鮮品を売り切ろうと割引の札を貼る主人を、  
獲物を見つめる獣のような目で見ている主婦達。

生活感と活気、喧騒に溢れる光景。

そんな中、大きな袋を担いだ髭の男は歩いていた。

葛美織から出て今まで、眼前に広がっている光景には一切何事にも興味を示しては居ないといった様子だった。

途中、やかましいくらいに騒がしい能天気そうな娘、それを追いかけるように歩いている三人組の若い男女ともすれ違ったが、特に気にも留めなかった。

そのまま男は大通りを抜け、外れにある宿場に入り、二階へ上がる階段をぎしりぎしりと音を立てて上る。



二階のある部屋の前に立ち、無言で襖を開けた。

そこは十畳程の小奇麗な部屋で、まだ時間も早い為に布団も敷かれては居なかったが、浴衣を肌蹴させた一人の男が寝転がっており、外をぼんやりとした眼で見つめていたが、男が現れた事で一つ欠伸をして頭だけをそちらに向けた。

部屋の中に居た男は、髭の男とは真逆に近い容姿をした男だった。髪を逆立て、やせ細った針金のような体。

眼を開けているのかどうかも不明瞭な程の細目、全体的に流線型を思わせる体躯を持ち合わせていた。

かといって頼りなげな印象は一切無く、蛇を思わせる陰湿な雰囲気を持つている。

頬に傷が刻まれており、それがまたこの男から発せられる陰気さを膨らまさせていた。

「んあ……よお、やっと帰ってきやがったか。さ、さつさとこんな糞つまらねえ町なんざ抜けて行こうぜ」

面倒臭そうに立ち上がり、懷をぼりぼりと掻きながら男はねめつくような粗野な口振りですう言い放つ。

一秒でもこんな所には居たくない、といった感じだった。

髭の男はその袋を部屋の隅に無造作に置きつつ、背を向けたまま

「いや、予定は変更だ」

と低く冷静な声で答えた。

その言葉に、瘦身の男は聞く。

「はあ？何言ってるんだ。こんな所に居た所で何にもなりやしねえだろっが」

「一つ。儲けにありつけそうな事が聞けたのでな」

「へっ。こんなシケた町でそんな話があるとは思えねえ。大方ガセをつかまされたんだろうぜ」

「かもしれん…だが「白銀狼」とあつては黙っているわけには行かない」

余り気乗りしていない会話だったらしく髭の男の方を向いてもいなかったが、

予想外の言葉を耳に入り、思わずそちらを見る。

頭の中で言葉を噛み砕いていく内に、

髭の痩身の男は徐々に口をひき吊り上げ歪ませた。

「ひひ…ひひひ…えふっ…えふ…」

歪んだ口からは下卑た笑いが漏れる。

どうにも堪える事は困難なようで、口を手で覆つてはいるが、指の隙間から零れ落ちていた。

「そいつぁ…随分と良い話じゃねえかおい。そのもしそれが本当だつていうのなら、今までの稼ぎ以上に稼げるよなあ…」

悪くねえ…悪くねえよなあ…。全く、良い話じゃねえか…それが本当だつていうのならよお…」

誰に言い聞かせているのか、くぐもつた声で同じような事を繰り返す痩身の男。

その眼に宿した闇は揺らぎ、よりどす黒く色を変える。

その変化にはもう慣れているのか、髭の男は話を続ける。

「そうだ。だが真偽の程はわからん。その話が確かなのか、不確かなものなのかは調べてみなければわからない。

だが、予定を変えてでも調べてみる価値はあるだろう…どうだ？」

聞くまでも無い質問ではあつた。

痩身の男はまだ顔を歪ませて下卑た笑いを続けている。

それがまるで答えかのように。

頭の中では取らぬ狸の皮算用が何処まで伸展しているのだろうか。

「どうだも何もねえよ…これ以上ねえ程のネタだ。これに飛び付かなきゃ【山蝗】の名が廃るというもんだ」

山蝗とは鳥類や野獣等を狩猟する事を生業とした者たちの事を指す言葉だった。

しかし猟師や狩人とは少し異なり、定まった住処を持たずに土地を転々としながら獲物を狩っていく類の者達を揶揄した言葉となる。何処からとも無くやってきては必要以上に山を荒らし、時には獲物を根こそぎ掻つ攫つていく様を蝗に見立てた言葉であり、土地の猟師に限らず、山蝗という物に対して好ましい目を向ける者は少ない。

つまり山蝗とは蔑視されている言葉となるのだが、彼等のように自ら名乗る事を好む者もいる。

そもそも猟を行うという事は、その地域ごとに許可を得なければならず、尚且つ何を取ったかという事を申請しなければならない。その申請を怠れば、所謂「不法狩猟者」となり、裁きを受ける事になる。

となれば彼等の行っている事は明らかに犯罪行為と言える。

その為警察もかねてよりこの問題に取り組んではいるのだが、まず事後に彼等が駆けつけたとしても後の祭になっている事が殆どで、

余程の事が無いと彼等を捕まえる事は難しい。

数多くの動物が生息している山や、希少種が要る山などには、主に機人で構成された警備隊を配置させている所もあるにはあるが、この国の全ての山に配置する事は現実問題として難航している。

山と言っても大小あり、中には山脈と言っても差し支えない程の規模を誇る山もあるのだ。

警備隊を配置させている山に限定しても、検挙率は上がったたり下がったりを繰り返している。

逆に警備隊から罠にかかった者がいたり、捕物劇のいざこざによって負傷者を生み出す為、

治療費・人件費保障等の問題も起き、さほど警備隊に割くわけにも行かない現状となっている。

山蝗も又、警備の目を掻い潜る技術、をより巧妙にさせているのだ。

彼等のような山蝗にとって、希少種や価値のある動物ほど格好の獲物であり、彼等の懐を十二分に暖める願っても無い物。通常ならばどこであろうと買取を拒否するだろうが、

そのような手段で手に入れた物であっても、買い手など国内外を探せば入手経路等一切気にせずに飛び付いて来る者はごまんと居るので差し障りは無い。

二人の山蝗はこの街を抜け、更に足を運んだ所に向かう予定だったようだが、

急遽降って沸いたこの話に、確証は無いが飛びつく事に決めた。

「…話は決まったな。少し予定は変わってしまいが、俺は明日その山へ入り「その」存在を確かめてくる。…出来ればその場で捕まえたい所だな。」

お前は…道具の手入れでもしていればいい」

その言葉が引き金になったのか、痩身の男は笑いをぴたりと止め、微かに目を見開き髭の男を睨む。

「何言ってやがる…」

すっと立ち上がり、ぬるりと近づいて男の鼻先までに顔を近付ける。

その眼に宿っていた物は何処までも暗く、濁り切った陰湿な光。

一般人ならば怯んでしまうのも致し方ない程異様な眼光だったが、髭の男はそれをいとも簡単に跳ね返す。

「俺も行くぜ。折角の飯の種、逃すわけにはいかねえだろう…？手前だけ美味しい思いつてのはなア…良くないよなあ」

「…何の話だ」

「きひっひ。とぼけるねえ…この前狩った筈の鶇つぐみが、どういわけか数羽無くなつてたりとかなあ…」。

気をつけねえといけねえだろう…？管理しないといけねえよなあ…お互いの為によろ

顔を近付け、下から覗き込むかのように睨み上げる。

二人の顔の距離は目と鼻の先で、考えている事すら聞かれそうな距離だった。

「…そう言う話は先月取ったいたちの毛皮が所在不明な理由を吐露してから言っんだな」

「はっ、それこそ何の話かわからねえなあ…」

それきり、無言で互いに睨み合っていた。

この二人は、共同で狩りをしている物の、互いに互いがなんらかの形で捕らえた獲物を拝借しているようだ。

時には二人で取った獲物を、時には相手が取った獲物を。

部屋の中がチリチリとした空気に変わる。

直ぐにでも血生臭い匂いを放つ事になりそうな、争い事を呼び寄せる空気。

が、その状況を一変させたのは痩身の男で、途端に陰湿な笑みに戻る。

「ま、互いに身に覚えの無え話しをしてもしょうがねえやなあ…？それよりも今の話をしなくちゃいけねえや」

その意見には髭の男も賛同したようで、微かに頷く。

「では、お前の道具を借りるぞ。鳥か鼠を出してもらう」

「あ？人に物を頼む態度じゃねえが…まあいいか」

痩身の男はもつさりと立ち上がり、自分の荷物なのだろう袋を漁り始めた。

「ああ？何処だあ…。ああ、あつたあつた…ほらよ」

と、さんざ探し尽くした挙句袋の底で発見した物を放り投げる。

髭の男が受け取った物は掌に収まる程の大きさの小瓶だった。

何かが入っているのだろうその瓶は土瓶であり、糊付けされた紙に「鼠」と書かれているだけで外からでは中身を知る事は出来ない。

だが、受け取った際にわずかながら「ちゃばん」という音がした為、中身は液体なのだろう事は窺い知れる。

髭の男は蓋を外し、鼻を寄せて匂いを嗅いだ。

瞬間少し眉をゆがめすぐに蓋を閉めた男を見て、愉快そうに痩身の男は続ける。

「…ひひ、お望みどおりの香りがするだろう？」

小瓶の中身は、どうやら凄まじい刺激臭を放つ液体だったようだ。

だが、髭の男が望んでいる品ではなかったらしく、無言で痩身の男を睨みつけた。

「おっと…悪りい悪りい。間違えて別の奴を渡しちまったようだなあ、貼り間違えてたみてえだ…ひひひ」

少しも悪びれた様子も見せず、痩身の男は再度袋を漁り、同じような瓶を手に取り投げ渡す。

再度渡された小瓶を、警戒しながら開け、匂いを嗅いだ。

今度こそは望んだ通り、鼠の死臭が漂う液体であった。

自身の他愛も無い悪戯に目の前の男がひっかかった事がさぞかし嬉しかったのだろう、

機嫌よく説明を始める。

「山鼠の血と臓物、それに土と山鼠が食う餌の蟲を碎いて三日三晩煮しめた奴だ。」

この匂いを出しときや手前の匂いは掻き消されるからな、畜生共にや怪しまれねえだろ。」

勿論白銀貉サマだつて騙せるだろうさ。」

にしてもだ…そう言うことならもうちよいここに居なきやならねえつて事だよなあ…お、そうだ」

と瘦身の男は先ほど渡した小瓶をその手から取り上げ、中身を少量部屋に撒くかのように垂らす。

すぐさま室内は異臭に包まれる。

「へっへ…いい事を思いついたぜ…」

と何かを閃いたような顔をしたと思いきや、襖を乱暴に蹴り倒した。

「…おい！店主は居るかっ！！」

大声を廊下に向かって張り上げる。

すると、暫らくもしない内慌てたように人の良さそうな顔をした宿

場の店主が階段を駆け上つてきた。

「お客様、一体何の御用でしょ」

「おい店主…この匂いは一体何だよ！？」

大袈裟に鼻を摘んで抗議を始める瘦身の男。

その言葉に動揺を隠し切れない店主は、匂いを気付いて顔を歪める。

「は、はい…こ…この匂いは一体…」

店主の言葉を遮るように瘦身の男は苦情を続ける。

「一体全体どうなつてんだよこの宿はよお。鼠の死骸でもそこらに  
いるんじゃないのかあ？」

「言、言われてみれば確かに…そうでございま いや！そんな事は  
決して御座いません！」

「じゃあこの匂いはなんだつてんだよ？まさかおめえ、俺等が臭え  
とでも言うのかあ！」

ぬっと手を伸ばし、店主の襟を掴む。

そのまま顔を自分の着ていた浴衣の裾部分を顔面に押し付ける。

「おら！俺がくせえのか臭くねえのか言ってみろよ！」

「ぐ……うぐ……」

結果的に鼻と口を塞がれている格好になっている店主は呼吸もままならず、顔を赤くする。

窒息してしまうのではないかという頃、塞いでいたその手をふと離す。

倒れこむように店主は床に伏せ、咳き込む。

「げほっ！げふっ……ごぼ……」

瘦身の男はしゃがみ込んで、呼吸を整えながら咳き込んでいる店主の顔を覗き込んだ。

「どうだよおい……俺がくせえってのか？おい」

「はあ……！はあ……い、いえ！そのような事は決して……御座いません」

横暴極まりないそのやりとりに加勢するわけでもなく、間に入って止める訳でもなく、

髭の男は傍観していた。

「なあ……なんで金払ってこんな思いしなきゃならねえんだ？俺等はお客様だぜ？」

ねめつくような顔を向けて更に店主に詰め寄る。

その眼は明らかに愉悦を含んでいた。

店主の顔は冷や汗を走らせ、雨の中を走ってきたかのようにびしょ濡れになっていた。

「か、かしこまりました。では、お隣の部屋に場所を」

「隣の部屋だあ？どうせ隣もこんな匂いがしだすぜきつとよ……」

なんだったらこの街の住人に確かめて貰う事にして貰うのが一番いいよなあ……そうだよなあ……」



と、騒ぎをより広めんとすと立ち上がったのを店主が必死に食い止める。

「し、承知いたしました！直ぐに当宿場で一番の部屋に変えさせて頂きます！代金は勿論やりません！ですから」

「…それじゃあとつとと部屋を変えてもらえねえかなあ！！鼻が腐り落ちちまうぜ！ったくよ！」

尚も悪態を付きつづける痩身の男に対して、何度も平謝りをしながら、下に降りていく店主。

その後姿が見えなくなり、階下が慌しくなりかけた頃、大柄の男は口を開いた。

「…こういう使い方も出来るのか」

痩身の男は肩を震わせ、畳に倒れこむ。

「きひひ…ふひやはははあはは！」

愉快で堪らないといった顔で畳の上を転がり回った。

その様は滑稽でありながら恐ろしく気色の悪い光景であった。

転がり終わるのも飽きたのか、畳に寝そべったまま痩身の男は口を開く。

「まさかこんな簡単に行くとは思わなかったぜえ。一番の部屋って言ってたな…まあこんなしみったれた宿場の一番部屋なんぞ、どうせ誰も使ってねえんだろうよ。」

なんでもそうさ、使ってやんなきゃばろくなっちまう。だから俺達が使ってやるんだ。むしろ感謝して欲しいくらいだぜ」

もうこの状態になってしまっただけは何を言っても耳には届かない事は重々知っているらしく、

髭の男は何も言わなかった。

山蝗は独自の狩猟方法を持っているとされるが、今の瓶の液体も山蝗の技術なのだろう。

彼等はこのような手を使って獲物を一網打尽にする事を好む者達のようなのだ。

「にしてもよお……」

痩身の男は、機嫌が良いままに立ち上がり、部屋の出窓の障子を開けて街を見る。

「この町はうるせえなあ……どいつもこいつも馬鹿みてえな顔しやがって……」

こつからこの瓶ぶちまけてやったら、面白いよなあ……【楔】とかよお……地面に仕掛けてやれたら最高だよなあ……きひっひひ」

窓から階下に広がる光景を覗いて要らぬ妄想にふけりだした痩身の男を、

髭の男はただ見ていた。

## 第一話　街にて

瘦身の男が睨みつけていたその賑やかな町並みの中を、一人の少女は満足げな顔を浮かべて歩いていった。

「んうゝっお腹一杯でもう入らないですぞゝ！あはははゝっ！」

その恍惚にすら見える表情を浮かべているのは紛れも無く那月であり、

その後を京一郎、鰻、蛍雪の三人は付いて歩く形となっていて、呆れながら、心配しながら、にこにこ微笑みながら、と各々異なった表情を浮かべている。

「何か…那月の奴。拳動がおかしくなっていないですか？」

満腹の向こう側にでも行っちゃってしまっているのだろうか、

ご機嫌を通り過ぎてらんちな状態に陥っている那月を見て、鰻も呆れた様子だった。

「大丈夫かな…食べ過ぎて何処がおかしくなっちゃったのかな…」

機人師として、家族として少し心配そうに見つめる京一郎を鰻は諭す。

「若先生、気になさる事はありません、いつもの事です。もう少しも経てば元に戻るでしょう。」

全く、那月は何にしたって食べ過ぎなのです。食べ物をも美味しく頂くには腹八分目が大事だというのに…那月、何事も腹八分目のだぞ。おい、聞いているのか？」

那月の食べっぷりと来たら、大食漢や健啖家も裸足で逃げ出すだろう。

蕎麦屋の店主のぼかんと開けた口には拳が楽に入るのでは無いかという程だった。

「ならいいんですが…それにしても全くと言っていいほど聞いちゃいないですね」

「全く…」

「うーん…私もちよつと食べ過ぎたみたい…あららら」

二人から少し後を歩いていた蛍雪が少し足取りを乱し、よろける。

「あ、そういうえは鰻 すわあ！」

「きやつ…」

そのまま、鰻に話しかけようとしていた京一郎の背中にぽふっと寄りかかる。

背中に、という事は。

蛍雪は体の前半分を京一郎の背中に押し付ける形になるという訳で、京一郎は何事かと後を振り向く。

振り向くと肩の上に蛍雪の顔が乗っているような状態になっている為、

蛍雪の整った綺麗な顔を至近距離で見ってしまう形になった。

「あ、あああ！…だ！だだだだだだだだ！」

京一郎としては「大丈夫ですか？蛍雪さん」とあくまで紳士的に言いたい所だったのだろうが、

口は思い描いた通りには動いてはくれなかった。

「あらまあ…ごめんなさい。京一郎さん。足取りを少し崩しちゃって…」

慌てている京一郎とは対照的に、蛍雪は少し眼を丸くした後、

また普段どおりのほんわかとした口調でにつこりと笑う。

しかしそうしている間にも、蛍雪の豊かな胸が京一郎の背中にぽよんとなっっているし、

ふわりとした髪の毛からは洗髪剤の匂いが香り、動悸が更に早まった京一郎は、

機人を生み出した現代の技術に少しだけ感謝し、少しだけ恨んだ。

機人の歴史は長く、当初は正に木偶という表現しか出来ないような

物だった。

当時の主な用途としては、畑を鳥害から守る為の案山子、子供の飯まま事遊びの玩具や、

お茶汲み人形等と言った、

およそ道楽の範疇としてのみの使い道だけであつた。

その見た目にも人形であることは明白であり、

今日に見られる一見して人間との違いがなくなる程の物では無かつた。

だが人の技術に対する飽くなき挑戦と失敗の礎の元、

機人を作る技術は飛躍的に進歩した。

その技術は機人のみならず多方面にも利用され、

その技術によつて、人力車から、発条とバネで動く車にさえも発展して作られるようになった。

街には技術を転用した電機灯等も使われ、夜に怯える事も少なくなつた。

又機人の体軀は人のそれとも寸分違わなかつた為、

義手や義足の技術さえも尋常ならざる速度で進歩し、

戦で四肢の一部を失つた者、病氣によつて失つた者達にとっては喜ぶべき副産物と言える。

元は道楽から発生した機人は、その多様性、

人よりも優れた運動能力から人を支える様々な用途に使われる事となり、今がある。

人と機人とは密接な繋がりが合つた。

その恩恵を今、少々異なる形でおすそ分けして貰っているこの若い機人師見習いは、

「おつおおお俺はだいじょーつつつ…ぶつですからあ…」

緊張の為に更にどもり始めてしまった。

京一郎は女性に免疫が有る方ではない。

小等、中等学校と共学ではあったものの、女子とそれ程親しい仲になるような事は残念ながら無かった。

元々、顔の造りは悪く無いし、性格も人好きのする穏やかな性格だが、

九櫛家という特殊な環境において、

事女性という存在に触れる機会が多すぎた為、逆に初心うしんになり過ぎてしまったのであった。

言うなればすべて雄大のせい、とも言えなくも無い。

機人師としては、女性型の機人を見なければならぬ事も当然あるし、

雄大の過去の功績からして女性型の機人の仕事の方が比重を占めているこの現状において、

免疫が無いという事は逆に仕事を手放してしまう事にも繋がってしまう。

それを治そうと雄大が様々な所へと蛍雪と鰻の目を掻い潜りながら京一郎を連れて行ったり、

荒療治を行ったりもさせたのだが、逆効果になってしまった事もあり未だに改善はされては居ない。

そのまま引き剥がす事も出来ずに蛍雪を引き摺ったまま、ぎくしゃくとした足取りで歩き出す。

傍から見ればなんとも奇っ怪かつ羨ましい光景に、周囲の人達も何事かと二人を見る。

「あら京一郎さん、お力が強いんですね」

そんな事はおかまいなしに見当違いの賞賛を送る蛍雪。

「ま、まあ…いつも行李背負ってますから。お、重たい物は慣れ

てますので…」

「まあ…。京一郎さん。私、そんなに重いですか？」

「いいいいいいえっ！とんでもないですっ！」

「ふふ、じゃあおんぶして貰ってもいいですか？」

その言葉にぎよつとなる京一郎。

「昔は、私も京一郎さんをおぶったりしていたんですよ？」

「あ、はい。覚えてます、なんとなくですけど…」

次第にいちやついているような雰囲気すら醸し出してきた二人に、周囲の通行人からはくすくすと笑い声すら囁かれていた。

だが、そんな二人を良しとしない者が居た。

「…それ位にしておくのだ蛍雪。余り若先生に寄りかかると若先生の負担になる…離れるべきだ」

無論その一部始終を見ていた鰻から、ぴしゃりと蛍雪へ忠告が入る。

「ええええ…京一郎さん。私、負担になってますか？」

不安げに京一郎を覗き込む。

「い、いいいえ！そんな事は無いです！」

更に慌てたように首を振る京一郎。

「何を言う、そのような問い方、若先生がそうお答えになるのは当然ではないか。」

それ位悟っていると思ったがな」

必死に否定する京一郎を尻目に、尚言葉を続けた。

その言葉は、鰻の声質とも相まって実に冷たく聞こえた。

蛍雪は、その様子に気圧されたのか、京一郎の耳に口を近付けて問う。

「鰻ったら、急に御機嫌斜めになっちゃいましたね。何かあったのでしょうか？」

「い、いや…俺は生憎と何も…」

「…京一郎さんには後は任せても良いですか。」

私は那月ちゃんがこれ以上遠くに行かないように付いてますから」

「お、俺がですか？」

「鰻の機嫌を直せるのは、私じゃあ無理みたいですし……。それじゃあお願いしますねっ、京一郎さん」

と言っただけと京一郎から離れ、薄情な事にこの場から早々に避難をして那月の元へとと……と歩いていった。

鰻は、このやり取りの最中京一郎達をやや追い越していたが、蛭雪が那月の元へと歩いていった後、歩みを止めて京一郎を見つめていた。

京一郎はそれに気付き、待たせるのは悪いと思いすぐに鰻の隣まで急ぎ足で並んで、歩き始める。

京一郎に比べて、鰻の方が背も足も長いいため歩幅が大きいが、鰻は自然に京一郎に歩幅を合わせて歩く。

（蛭雪さんに無理って言われたら、俺でも無理ですよ……）

ちらと鰻の横顔を見ると、

鰻は表情こそ変わっていない物の、その体から形容し難い何かが発せられていた。

時として、鰻はこのようなちりつく空気を放つ。

着ている服装とも相まってか、正にこれから果し合いをしに向かう剣士という表現がぴつたりと合う雰囲気だった。

なんとかこの空気を緩和しようと、正面を向き直り京一郎はどうにか話題を振り絞って鰻に話し掛けようとするが、如何せんこれと言った話題が見つからなかった。

鰻から話し掛けてくるような雰囲気も無く、ただ沈黙が続く。

一分が数十分にも感じられた頃、鰻が口を開いた。



「…若先生は…明日の御仕事は御座いますか」

「え？…あ、はいっ！」

明日は、午前に一件訪問があつて…あ、そうだ。

それから夕方過ぎ頃に里黄さんの所に行こうかと思つてますよっ！」

鰻の方から話し掛けて来た事が余程嬉しかったのか、笑顔になつていた京一郎。

しまつた、と京一郎は後悔した。

その証拠に、鰻は京一郎をじ…と凝視にも近いほど見つめていた。

「か、鰻さん。どうかしました…か？」

不安げに問う京一郎から少し視線を外す。

「いえ…なんでもありません。

それにしても、里黄殿の所にですか。

確か、先日お仕事を終えたばかりの筈ですが…」

「ええ、治療後不具合が無いか尋ねてみようかと思つて。

接合が甘くてまた欠けたり、筋がほぐれたりしたら大変ですから。

俺のせいでお客さんに迷惑をかけるわけにはいきませんからね」

余程のことが無い限り、京一郎は追診という名目で治療した機人の元へ再度伺う事になっている。

今の所そのような不具合や、苦情は来ていないが、もしもという事もある為にやっている事だった。

鰻はその言葉を聞き、大きく頷いた。

「…成る程、殊勝な心がけだと思います。…では若先生、明日は私も御同行いたしましょう」

「え？鰻さんも…ですか？でも、この所ずっと出稽古していたみたいですし、たまには身体を休ませたほうが…」

突然の申し出に驚く京一郎。

折角の休みなのだから、鰻自身の為に有効に使って欲しいと思つたのだが、

「ご心配痛み入ります。ですが、それほどやわな身体ではありませんから。」

荷物持ちにでもお使いください」

半ば押し切られるように鰻に言い寄られた。

多分、このまま京一郎がどのような事を言っただとしても、鰻には叶わないだろう。

「…わかりました。それじゃあ、明日はお願いしてもいいですか？」  
「こちらこそ、宜しくお願いします」

鰻さんも一緒…という事は、下手な事は出来ないな…。

京一郎は気を引き締めた。

鰻の手前、下手な事をしようものなら失望されてしまう。

それだけは避けなければならぬ。

鰻は事その他、九櫛家という看板に気を傾けている帰来がある。

雄大が立ち上げ、亡き父が磨かんとした看板だ。

孫の自分が失敗するわけには行かない。

京一郎の頭の中は、明日の事に占有されていた。

その為、鰻から放たれていた空気が和らいでいる事には、この時の京一郎は気が付かなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9114c/>

---

小夜機人

2010年10月24日03時53分発行